２０２４年1月 13 日

アーカイブされた史資料を活用した研究・考察の実践
～琉球国の祭祀儀礼道具の研究から～

沖縄美ら島財団
首里城公園管理センター
上江洲安亨（博士（芸術学））

１．今日の講義の骨子

①首里城内の年中行事における共飲儀礼の考察
②琉球漆器の円形二段食籠の木地構造に関する考察
③琉球国の御玉貫・御玉垂に関する考察
④近世期に琉球国へ導入された工芸品の製作技術
⑤近世期に琉球国で工芸品に使用された原材料に関する考察

２．講義内容

①首里城内の年中行事における共飲儀礼の考察

・首里城を中心とした王府の年中行事

正月から十二月までに 90 行事

年中行事を行う主体を①男性官人中心の表の儀礼（69 事例）、②女神官中心の内の儀礼（9 事例）、③男性官人・女神官が参加した表・内双方の儀礼（15 事例）に分類。

年中行事・儀礼の由来区分を①中国系儀礼（12 事例）、②大和系儀礼（25 事例）、③琉球固有（7 事例）、④宗教（仏教）（30 事例）、⑤宗教（神道）（8 事例）、⑥琉球固有信仰（15 事例）、⑦農耕儀礼（12 事例）、⑧***共飲・飲食儀礼（30 事例）***、⑨その他・不明（5 事例）の 9

種に分類。

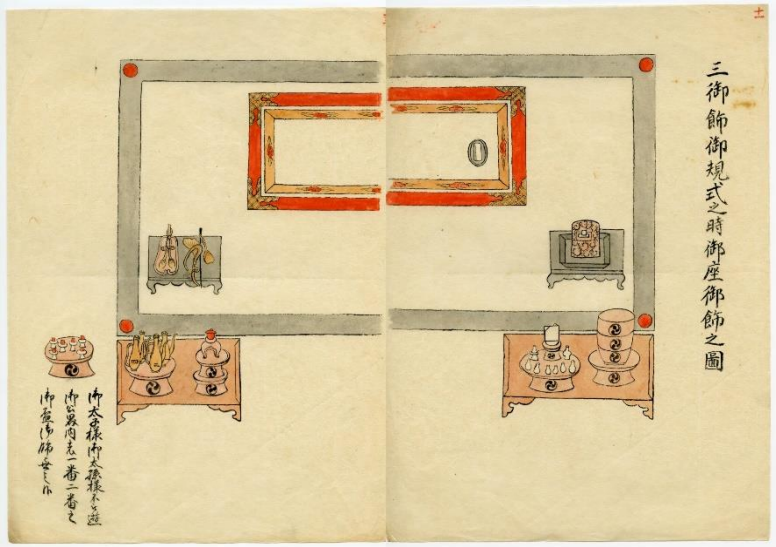
共飲儀礼が 30 事例もあり、表の儀礼・内の儀礼として男性官人・女神官双方が参画する行事が多かったが、雍正 7（1729）年に共飲儀礼の 14 事例が廃止・縮小となり、特に 13 事例は女官への下賜儀礼（御佳例御盆）が廃止され男性官人中心の儀礼となる。

・首里城内の共飲儀礼

美御前揃三御飾御規式の儀礼

正月元日・正月十五日・冬至・首里城重修完成・国王元服（事例としては尚泰王）等の国家的慶事

道具立の分類→①御印箱一具・②御印請臺一具・③黒漆卓・④御開印吉書一枚・⑤君使官一具・⑥御拂子・御團羽各一具・⑦*御籠飯*一具・⑧御菓子盆（大）（中）（小）・⑨金之フイハン御盃一具・⑩流臺一具・⑪銀脚杯六脚・⑫托付銀鉢二脚・⑬朱漆卓二脚・⑭御酒椀一具・⑮*御玉垂（御玉貫）*四基・⑯酒椀六基



『圖帳　當方』「三御飾御規式之時御座御飾之圖」

鎌倉芳太郎資料　沖縄県立芸術大学所蔵

南風御殿において国王及び家臣団との共飲儀礼

五節供の儀礼

七日節供（人日・一月七日）→正殿下庫理

三日（上巳・桃の節供・三月三日）→1671 年より南殿

五月五日（端午の節供・五月五日）→1671 年より南殿

八朔（八月一日）→1671 年より南殿

九日（重陽の節供・九月九日）→1671 年より南殿

※七夕は入っていない。

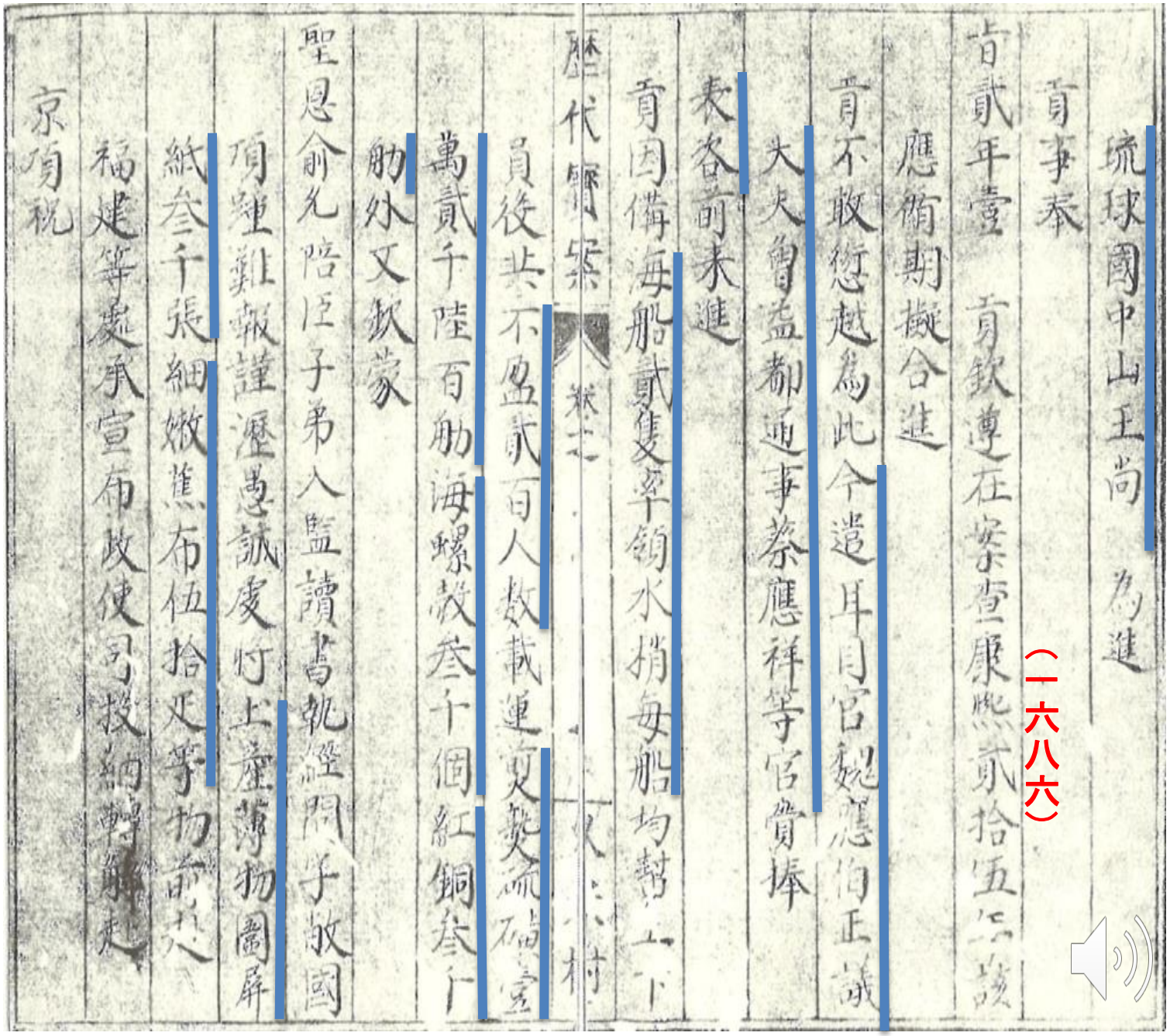
・このうち、御籠飯（円形二段食籠）と御玉貫が少ないながらも複数現存事例や古写真が残っており、比較による器形・製作仕様による編年が可能。

琉球王国の史書・編纂物

書名	成立・編纂年代	編纂責任者	備　　考
『中山世鑑』	1650 年	羽地朝秀	『琉球神道記』・『保元物語』・『平治物語』の影響あり。
『中山世譜』（蔡澤本）	1697～1701 年	蔡澤	蔡澤が『中山世鑑』を漢訳補訂したもの。
『中山世譜』（蔡温本）	1724～25 年	蔡温	蔡温が父蔡澤が編纂した『中山世譜』を改修したもの。『明実録』を抄録した汪楫著『中山沿革志』の影響あり。
『球陽』	1743～45 年	鄭秉哲等	編纂後も 1876 年まで仕次（書き継がれる）される。政治・経済・外交の記事だけでなく、気象・天変地異・善行美談・伝承記事もある。
『琉球国由来記』	1703～13 年	向祐等	琉球王国最大、最古の体系的な地誌。王府の公式行事、官職制度、諸事の由来、王城と首里の御嶽・祭祀、王陵、泊村・那覇の由来記、久米村の旧記、寺院、地域の御嶽・祭祀等の記録を収録。
『琉球国旧記』	1731 年	鄭秉哲等	『琉球国由来記』の誤りと補足を行い漢文に書き改めた地誌。
『おもろさうし』	1531～1623 年		琉球最古の歌謡集。祭祀儀礼の場で謡われる「おもろ」を編集掲載している。
『歴代宝案』	1424～1867 年		琉球王国の外交文書及び文案を集成したもの。中国・朝鮮・東南アジア諸国との外交文書、約 5700 文書を収録。
『家譜』	1689 年～		1689 年に系図座設置。士族各家から系図座に家譜原案を提出。事実関係を精査し公印が押され、1 部は系図座・1 部は各家で保管。定期的に仕次（更新）もなされた。

歴代宝案

琉球王国歴代の外交文書を集成した漢文史料。
琉球と中国の明・清王朝や、朝鮮、シャム・ベトナム・ジャワ・スマトラ・マラッカなどの外交文書が記録されている。
外交文書の収録期間は、琉球王国統一前後の1424年から崩壊直前の1867年の443年におよぶ。
第1集49巻。第2集200巻。第3集13巻。目録4巻。別集4巻。全270巻。編纂され、250巻が現存する。文書数にすると約5700文書。
中国の朝貢国で大量に外交文書が残っている類例は琉球しかない。


琉球國中山王尚　為進
貢事奉
皆貳年壹　貢欽遵在案查康熙貳拾伍年該
應循期擬合進
貢不敢愆越為此今遣耳目官麻應伯正誠
大夫曾益都通事蔡應祥等官賫捧
表咨前來進
貢因備海船貳隻平鎖水梢每船均帶上下
員役共不盈貳百人數載運夏麥琉磺宣
萬貳千陸百觔海螺殼叁千個紅銅叁千
觔外又欽蒙
聖恩俞允陪臣子弟入監讀書執經問子敢國
項難報謹遵愚誠度竹上篋薄物圖屏
紙叁千張細嫩蕉布伍拾疋等物前往
福建等處承宣布政使司投納轉解
京項稅

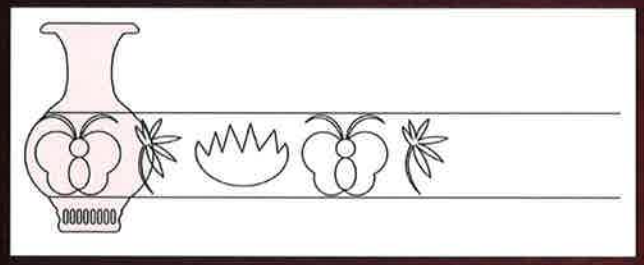
（一六八六）

并数ヒ事 商ひ仕候次言上仕掛者也
右之首尾言上仕ル事

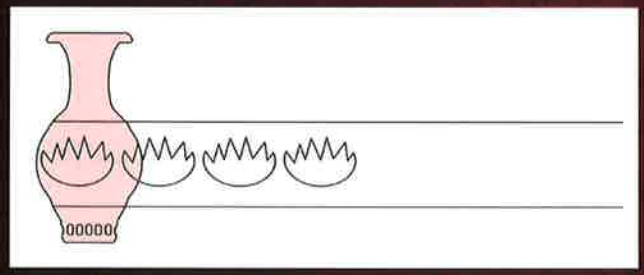
別紙之日常之ひ簾掛者ハ言上
之次第 右文用ヒ元朝日
十五日ニ商ハ掛者不申ハ
一 三り御所并御所ハ掛之ひ道具
三之以下之ひ酒肴ハ朱以ひ
ひり ひ菓子金ひ過去大庫裏
并数ひ敬ニ并用之御之差ひ
用之ひ ひ ひり ひ菓子之差ひ
ひ ひり湯差ひ湯之ひ ひり
海鼠ニ差商日ニ并ハ様二月并
御名聞ひ仕候次言上仕ル事
御所様ハ御お渡ハ様御書院ニ
商ニ御菓道仕候次二月若宮之
を仕中進ニ仕ル事

型式分類調査のイメージ

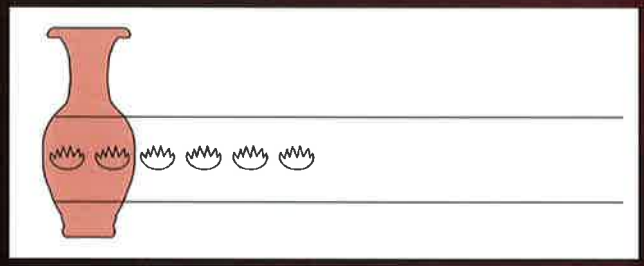
製作時期
が古い



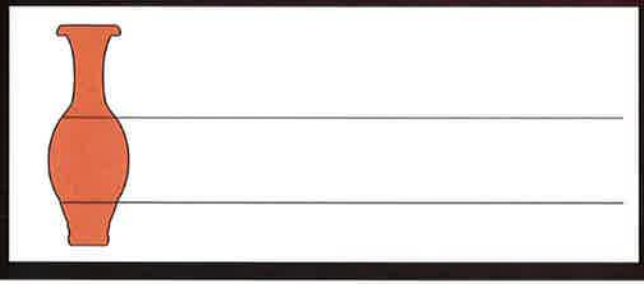
胎土：白色
器形：幅広でふくよか
図像：蝶・花など。図像が大きい
高台：模様あり



胎土：白色だがやや赤みがある。
器形：胴部がやせる。
図像：花のみ
高台：模様あり。図形の大きさは退化。

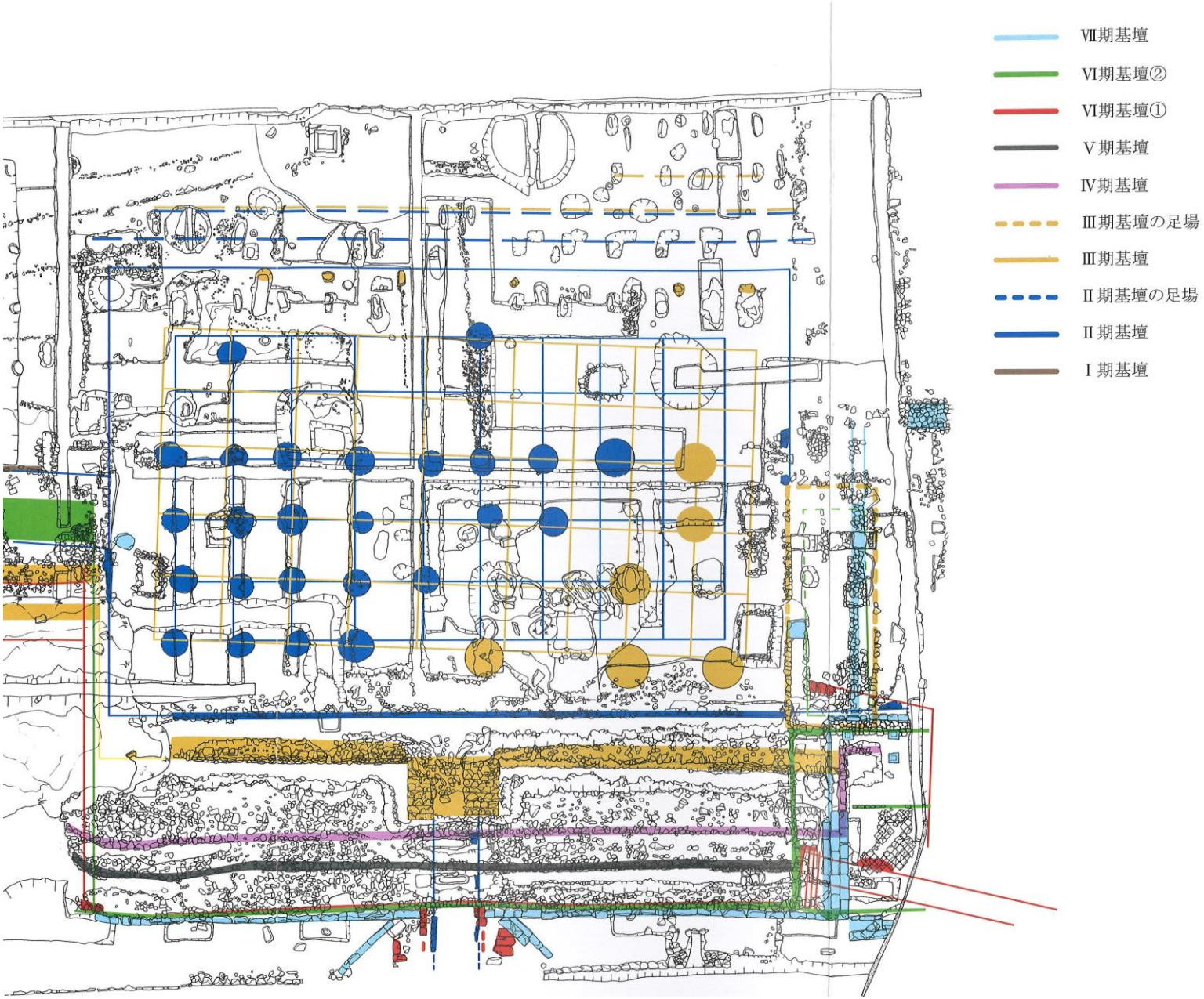


胎土：赤みのある胎土に変化。
器形：胴部はさらにやせる。
図像：花のみ。図像の大きさは退化。
高台：模様なくなる。

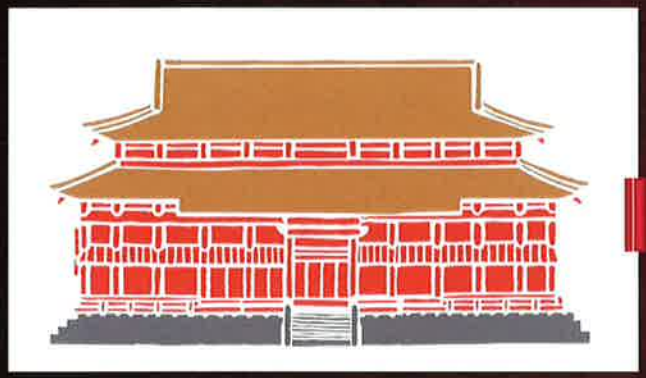


胎土：茶褐色の胎土。
器形：胴部はさらにやせる。
図像：図像はなくなる。
高台：模様なくなる。

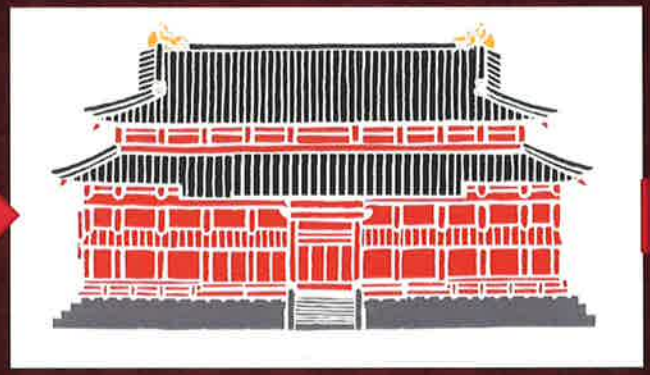
製作時期
が新しい


Ⅶ期基壇
Ⅵ期基壇②
Ⅵ期基壇①
Ⅴ期基壇
Ⅳ期基壇
Ⅲ期基壇の足場
Ⅲ期基壇
Ⅱ期基壇の足場
Ⅱ期基壇
Ⅰ期基壇

正殿変遷のイメージ



15世紀頃



17世紀後半

18世紀初頭

18世紀前半

18世紀中頃～

表１

首里城における一年を通じた儀礼・祭事

月	祭事	内容	儀礼・祭事の区分	変更が確認できる事例	変更内容
正月	１元日米蒔	元日の早朝に御庭の龍柱の左右に白砂を敷く（由・旧・式）	表の儀礼 琉球固有か		
	２御簾掛	元日に百浦添御殿（正殿）に五彩色の鶴亀、松竹、鳳凰、牡丹の画簾を飾る。元日に新しい画簾に掛け変え通年、掛け置かれる（由・旧）	表の儀礼 中国系儀礼		
	３辺戸之御水且吉方御水献上	十八世紀初頭 年末に辺戸の水を獻上し御照堂に保管。元日早朝、その年の吉の方角の水（浦添・西原・首里・識名のいずれかの湧水）と混ぜて献上する（由・旧・女） 十九世紀末 国王が精進し、御日之御前・御火鉢之御前（おせんみここちゃ）・御額字（皇帝御書扁額）に参拝。聞得大君御殿より辺戸から献上された水が献上され国王を、その水でお撫でする（聞）	表・内双方の儀礼 日本系儀礼	御照堂より辺戸の水献上され吉方の水を混ぜ儀礼を行う（十八世紀初頭） 聞得大君御殿より辺戸の水獻上（十九世紀末） 変更時期不明	
	４楽器飾并音楽	元日に御庭に楽器を飾り置き、午前四時頃から六時の間に三回。午前八時から正午の間に三回演奏する（由・旧）	表の儀礼 中国系儀礼		
	５御佳例御盆	元日に芋の御汁・団子・赤飯・飯を大台所から御内原へ献上する（由・旧） 雍正七（一七二九）年に廃止される（球・旧） 雍正十（一七三二）年に出仕の官員に素麺を賜う（球）	内の儀礼 共飲・飲食の儀礼	雍正七年廃止。 雍正十年内容変更か	規模・内容の見直し
	６社参	元日に御庭で四拝を行い、波の上から円覚寺までの社寺に参詣して、首里城に戻ってくる。社参の人数は三百十一人（由・旧・式）	表の儀礼 宗教（仏教・神道）儀礼		
	７御印披	元日に御印披御物の目録が作成され、三司官が御朱印を押し、国王が閲覧する（由・旧・式）	表の儀礼 中国系儀礼		
	８朝拝御規式	元日に御庭で国王・諸官がその年の吉の方角に焼香する（由・旧） 康熙五十八（一七一九）年、吉の方角に焼香する儀礼を冬至と同じく北向き（子之向）に変更する。近世末期も北向きの儀式で継続して行われている（球・式） 国王が正殿二階の唐破風の間に着座して、王妃・諸官が国王に対して焼香を行う（由・旧） 近世末期には王妃の焼香が無くなり、三司官を筆頭に焼香を行う（式） 儀礼終了後、御庭で参加者に酒が振る舞われる（大通（オトーリ））（式）	表の儀礼 日本系儀礼の要素有（一七一九年以前） 中国系儀礼の要素が強くなる（一七一九年以降） 共飲・飲食の儀礼	康熙五十八年に吉方から子之向に変更	

９御照堂御拝	元日に朝拝御規式終了後、国王が三司官等を円覚寺御照堂へ派遣し拝礼をさせる（由・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教）		
10南風御殿の出御	元日に御照堂御拝終了後、南風御殿（南殿）で国王が出御して世子・世孫・王子衆・三司官衆等に酒を賜う（由・旧）	表の儀礼 日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼		
11下庫理の出御	元日に南殿の出御の儀礼が終了後、国王が正殿下庫理（一階）に出御し、美御前揃三御飾の儀式を行い、世子・世孫・王子衆・三司官衆等へ酒・茶を賜う（由・旧）	表の儀礼 日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼		
12毎月朔日・十五日御拝	毎月元日・十五日に世子・世孫・王子以下の諸官が首里城に登城する。また午後八時に御庭の左右で夜番が御日・御月御前と正殿に向かって拝礼をする（由・旧） 雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	表の儀礼 琉球固有か	雍正七年に廃止	廃止
13初御年日	正月の国王の誕生日と同じ日にちと正月初七日に御嘉例御盆を大台所から御内原へ献上する（由・旧）	内の儀礼 琉球固有か 共飲・飲食の儀		
14三番出仕	王府には三番出仕という三交代制の勤務体系（丑、巳、酉番）があり、年始の初出仕に酒を賜る。また、この時は朝衣朝冠を着用する（由・旧）	表の儀礼 琉球固有 共飲・飲食の儀礼		
15御印飾並御美腰	毎月元日、十五日、御印と御剣を正殿に飾る（由・旧）	表の儀礼 琉球固有か		
16初行幸	国王は吉日を選び百官を率領し首里森御嶽・園比屋武御嶽を拝礼の後に円覚寺・天王寺・天界寺へ行幸する。行列には路地楽と鳴火矢を用いる。康熙十一（一六七二）年、三日に定め鳴火矢を廃止する（由・旧・球） 雍正七（一七二九）年、国王の行幸を二日とし、三日に王妃・翁主等の婦女の拝謁に変更する（球）	表の儀礼 宗教儀礼（琉球固有信仰・仏教）	康熙十一年、日程の変更。鳴火矢の廃止 雍正七年、日程の変更。国王と王妃等の婦女の拝謁日の分離	日程・内容の変更
17配帙献上	王府の禅寺が元旦から三日まで祈念した配帙を国王に献上する。但し、慈眼院だけは大美御殿に配帙を献上する（由・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教）		
18七日節供	七日、国王が下庫理の玉座（御差床）に出御して節供の儀を行う。親見世より御鏡餅三飾・御酒樽一荷（糯米・醴酒）が進上される。禅家衆・聖家衆出仕する（由・旧・聞・女）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教） 日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼		
19御盆献上	七日、元日の御佳例御盆の献上と同じものを大台所から御内原へ献上する（由） 雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	内の儀礼 共飲・飲食の儀礼	雍正七年に廃止。	廃止
20御祈祷	十一日から十三日までの三日間、正殿大庫理（二階）に聖家（真言宗）の僧侶に祈祷をさせる。五月・九月にも同じ祈祷を行う（由）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教）		

21楽器	十五日、元日の楽器飾並音楽と同じく、正殿御庭に楽器飾と演奏を行う（由）	表の儀礼 中国系儀礼		
22御盆献上	十五日、元日の御佳例御盆の献上と同じものを大台所から御内原へ献上する（由） 雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	内の儀礼 共飲・飲食の儀礼	雍正七年に廃止。	廃止
23社参	十五日、元日の社参と同じ内容の社寺参詣を行う（由）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教・神道）		
24朝拝	十五日、国王が琉装で正殿唐破風の間（二階中央）に着座して諸官は御庭で御拝する。正殿下庫理（一階）では元日の下庫理の出御と同じく三御飾の儀式があり、国王にお酒・お茶を献上して、そのお流れを諸官が賜る（由）	表の儀礼 中国系儀礼 下庫理出御以降は日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼		
25御照堂御拝	十五日、元日の御照堂御拝と同じく、国王が三司官等を円覚寺御照堂へ派遣し拝礼をさせる（由）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教）		
26南風御殿の出御	十五日、元日の南風御殿の出御と同じく、御照堂御拝終了後、南殿で国王が出御して世子・世孫・王子衆・三司官衆等に酒を賜う（由）	表の儀礼 日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼		
27御参詣	吉日を選び国王が弁財天堂、弁ヶ岳、末吉宮、観音堂、識名宮へ参詣する（由・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教・神道・琉球固有）		
28御甲子祈念	円覚寺、天王寺で甲子ごとに国王の健康・子孫繁栄等の御祈念が終日行われ、翌朝に御配帙を献上する（由・旧） また正月初めの甲子の日に七社の祝部がその年の吉の方角の神社で、合同で祈念を行い、仏餉を国王に献上する（由・旧） 雍正六（一七二八）年に廃止される（球）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教・神道）	雍正六年に廃止。	廃止
29王城での御甲子御拝	甲子の日の戌の刻に夜番の役人と二庫理（旧記では下庫理）の役人が御庭の左右で正殿に向かって御拝（三十三拝が二度、九拝が一度）を行う。尚豊王代には寅（東北）の方角を拝んだ（由・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（神道） 十七世紀前半は琉球固有の儀礼だった時期ありと推定		
30辺戸・今帰仁・知念・玉城御タカベ	正月に日を選んで当役・勢頭役を辺戸・今帰仁・知念・玉城に派遣し祈願させる。内容は国王の健康・子孫繁栄・五穀豊穣・唐・大和・離島への航海安全祈願等（由・旧） 辺戸・今帰仁の御タカベは雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	表の儀礼 琉球固有信仰	雍正七年に廃止。	廃止
31恵日御拝	毎月三十日（小月は二十九日）に円覚寺へ、毎月二十八日に安国寺へ恵日の御拝をする（由・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教）		

	32百人御物参	正月・四月に日を選んで三平等の大あむしられ等の神女達、役人で聞得大君御殿、首里殿内、首里城（城内の十御嶽と御当蔵）、園比屋武御嶽、国中城御嶽を巡礼する。（由来記・旧記・女官御双紙には前夜、真壁御内で夜のオタカベがあるとある）（由・旧・女）	表・内双方の儀礼 琉球固有信仰		
	33御竈清	大台所、御当蔵の竈清めは、正月十一日・五月三日・九月十九日に僧侶（旧記には護国寺の僧）が読経して御幣で竈を清める（由・旧） 雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	内の儀礼 宗教儀礼（仏教） 日本系儀礼	雍正七年に廃止。	廃止
	34毎月朔日・十五日出仕	毎月一日・十五日、世子・世孫、王子・按司、三番の三司官・御物奉行、申口吟味役・当番の親方以下朝衣朝冠で出仕する（由） 国王のため、火の神の御前（おせんみこちゃ）へみはなと御五水（酒）を供え、御たかへを唱え御拝する（女）	表の儀礼 琉球固有		
二月	35久高島行幸	二月に麦が初熟の時、隔年一度、国王は久高島に聞得大君達とともに行幸する。行幸のない年は弁ヶ嶽へ行幸し、久高島に拝礼する。但し、康熙十二（一六七三）年に、この行幸の儀は当役が代参することに改められる（由・旧）	表・内双方の儀礼 琉球固有信仰 ※康熙十二年国王行幸廃止	康熙十二年に、国王行幸から当役代参に変更	変更
	36麦穂祭	王府が日を選んで各間切の根所でノロが祭祀を行う。真和志・南風原・西原間切から麦穂八結が首里城に献上され、出仕の役人に酒を賜う。現在の二月ウマチーにあたる（由・旧・聞・女）	表の儀礼（首里城） 各間切ではノロも参加した儀礼 琉球固有信仰 農耕儀礼 共飲・飲食の儀礼		
	37春秋祭祀	崇元寺に主祭官を派遣して、仲春・仲秋（二・八月）の上旬の戊の日に中華の祭礼を行う（由・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教） 中国系儀礼		
	38長月御タカベ	二月中に日を選んで正月・四月に実施する百人御物参と同じ祭礼を実施する（由・旧・女） 雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	表・内双方の儀礼 琉球固有信仰	雍正七年に廃止。	廃止
	39彼岸	春分（二月）・秋分（八月）に禅家の僧を首里城書院に呼び、齋宴を賜う（由・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教） 日本系儀礼		
三月	40三日	三日、大台所から御内原へ御僅例御盆と同じ料理とよもぎ餅を献上する。円覚寺から桃の花が献上される。国王が南殿・御書院に出御し、世子・世孫、王子及び三司官以下の役人は朝衣朝冠で日本風の礼で出仕する。国王に酒を献上し、そのお流れを賜う。また南殿では茶も賜う（由・旧） 康熙十（一六七一）年に南殿・書院となる。それ以前は下庫理で実施していた（由） 御僅例御盆は、雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	表・内双方の儀礼 宗教儀礼（仏教） 日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼	康熙十年に下庫理より南殿・書院に儀礼場所を変更 雍正七年に御僅例御盆のみ廃止	儀礼開催場所の変更 一部廃止による縮小

	41麦大祭	王府が吉日を選んで麦大祭を行う。内容は麦穂祭と同じ。現在の三月ウマチーにあたる（由・旧）	表の儀礼（首里城） 各間切ではノロも参加した儀礼 琉球固有信仰 農耕儀礼 共飲・飲食の儀礼		
	42四品御物参	三・八月に吉日を選んで百官を以って各所の諸神に祈願をさせる。祈願の内容は国王の長寿、子孫繁栄、五穀豊穣、唐・大和・離島航海の諸船の安全祈願（由・旧） 雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	表・内双方の儀礼 琉球固有信仰	雍正七年に廃止。	廃止
	43四度御物参	三・八月に吉日を選んで十四人一組を九組編成し、九つの拝所に派遣して四度の御拝を行う。祈願の内容は国王の長寿、子孫の健康、五穀豊穣、唐・大和・離島航海の諸船の安全祈願（由・旧・女） 雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	表・内双方の儀礼 琉球固有信仰	雍正七年に廃止。	廃止
四月	44一日更衣	四月一日より九月三十日の間、夏衣を着用する（由・旧）	表の儀礼		
	45山留	四月一日より五月三十日の間、大風による作物の被害を恐れて斎戒するということから、鳴物等や竹木・芭蕉・茅・葦の伐採、川で魚を捕る、女性が海辺で遊ぶことを禁止する（由・旧） 雍正七（一七二九）年に禁令を廃止する（球）	表の儀礼 農耕儀礼	雍正七年に廃止。	廃止
	46知念・玉城行幸	四月に稲が初熟の時、隔年一度、国王は知念・玉城に聞得大君達とともに行幸する。但し、康熙十二年（一六七三）に、この行幸の儀は当役が代参することに改められる（由・旧・聞・女）	表・内双方の儀礼 琉球固有信仰 ※康熙十二年国王行幸廃止	康熙十二年に、国王行幸から当役代参に変更	変更
	47畔払（アブシバレー）	王府が吉日を選び、諸間切でその日が吉の人を吉の方向に向わせて畔の草を払わせる（由・旧）	表の儀礼 農耕儀礼		
	48御状渡	南殿で国王が薩摩へ派遣する年頭使に書状を授ける。この時に国王に献上された酒のお流れを蔵衆・与力まで賜る（由・旧）	表の儀礼 日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼		
	49四月八日（灌仏）	八日の釈迦の誕生日に仏像等に甘露水をそそぐ行事の例から円覚寺、天王寺、天界寺の僧が浴水を国王に献上する（由・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教）		
五月	50五月五日	五日、国王が南殿に出御して三月三日と同じ儀式を行う。御台所から御内原へ御佳例御盆と同じ料理と、かしわ餅が献上される。円覚寺からは菖蒲が献上される（由・旧） 康熙十（一六七一）年に南殿となる。それ以前は下庫理で実施していた（由） 御佳例御盆は、雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	表・内双方の儀礼 宗教儀礼（仏教） 日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼	康熙十年に下庫理より南殿に儀礼場所を変更 雍正七年に御僅例御盆のみ廃止	儀礼開催場所の変更 一部廃止による縮小

	51御祈念	五月に日を選んで正月十一～十三日に行った御祈祷と同じ祈祷を正殿大庫理（二階）で聖家（真言宗）の僧を呼んでさせる	表の儀礼 宗教儀礼（仏教）		
	52稲之穂祭	五月に日を選んで北殿において三平等の大あむしられ等が祭祀を行い稲の成熟を祈願する。その後、国王が正殿下庫理に出御し、美御前揃之御規式を行う。おもろも謡われる。国王が入御（退出）後、官員に稲穂・酒が賜る。真和志・南風原・西原間切から稲穂が首里城御内原に献上され、出仕の役人に酒が振る舞われる。各間切の根所でノロが祭祀を行う。現在の五月ウマチーにあたる（由・旧・女）	表の儀礼（首里城） 各間切ではノロも参加した儀礼 琉球固有信仰 農耕儀礼 共飲・飲食の儀礼		
	53勅書迎	進貢使節団が帰国すると、那覇港の迎恩亭で皇帝からの勅書及び下賜品を龍亭に乗せ、首里城に運ぶ、国王は御庭で出迎えの儀式を行う（由・旧）	表の儀礼 中国系儀礼		
	54大世之閉開	六月一日の前日の午前二時頃、城内の門を開き、福神を招き入れる（由・旧・女） 雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	表の儀礼 日本系儀礼か	雍正七年に廃止。	廃止
六月	55稲大祭	六月に日を選んで稲大祭を行う。内容は稲之穂祭と同じ。但し稲の成熟を祝う儀なので稲穂の献上は行わない。現在の六月ウマチーにあたる（由・旧）	表の儀礼（首里城） 各間切ではノロも参加した儀礼 琉球固有信仰 農耕儀礼 共飲・飲食の儀礼		
	56年浴之事	吉日を選んで収穫された新米を食べて祝う。時の大屋子が吉の方角の二ヶ所の湧水を汲んできて献上する（由・旧） 御台所から御内原へ御佳例御盆が献上される。 御佳例御盆は、雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	表の儀礼 農耕儀礼 日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼	雍正七年に御佳例御盆のみ廃止	一部廃止による縮小
	57御誕生日	国王の誕生日を祝う。御嘉例御盆二通（御食・炊飯）が御台所より御内原へ献上される。諸士は位階昇進が言上される。王子・按司・三司官等に御料理を賜る（由来記・旧記編纂時の尚敬王の誕生日が六月十九日のため） 御嘉例御盆二通は、雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	表・内双方の儀礼 ※六月実施は尚敬王期のみと考えられる。 共飲・飲食の儀礼	雍正七年に御佳例御盆のみ廃止	一部廃止による縮小
七月	58七夕行幸	七日に、国王が円覚寺、天王寺、天界寺、大美御殿へ行幸し、先王の御拝を行う（由・旧） 雍正七（一七二九）年に七月十四日に変更する（球） 七日に、久米村の官員長史等七名で正殿下庫理（一階）において国王の衣冠を陰干しする（由・旧） 雍正七（一七二九）年に久米村の官員による陰干しを止め、當官が行う。但し長史は督理のため登城する（球・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教） 日本系儀礼 ※七夕は本来中国由来だが『由来記』編纂の史官は日本由来と認識。	雍正七年に三ヶ寺の国王行幸を七月七日から七月十四日に日程変更 国王衣冠の陰干しを久米村官員中心から下庫理當へ担当を変更	日程の変更

	59御施餓鬼之事	十三日に円覚寺、天王寺、天界寺で先祖の霊を迎え、十四日円覚寺で祭祀を行う（由・旧・女） 康熙五（一六六六）年、名代を三司官から王子に改める（由・旧） 康熙七（一六六八）年、祭祀の実施場所を方丈の庭から方丈の階下正面に改める（由・旧） 康熙七年、天王寺の祭祀を十四・十五日両日から十五日の一日に改める（由・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教）	康熙五年、円覚寺の祭祀の名代を三司官から王子に変更 康熙七年、祭祀の実施場所を方丈の階下に変更 天王寺の祭祀日程の変更	名代（派遣者）・祭祀場所・日程の変更
	60忌日	先王・先妃の命日に円覚寺、天王寺、天界寺で供養の祭りを行う（由・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教）		
	61年忌	先王・先妃の御年回忌に当る年の七月に天王寺、天界寺に茶屋を建て、国王・諸官が参詣して御拝礼を行う。また薩摩の在番奉行等も招待する。この時に首里・那覇の踊りも披露する（由・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教） 日本系儀礼		
八月	62八朔	一日に、国王が南殿に出御して三月三日と同じ儀式を行う。御台所から御内原へ御佳例御盆と同じ料理が献上される（由） 康熙十（一六七一）年に南殿となる。それ以前は下庫理で実施していた（由） 御佳例御盆は、雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	表・内双方の儀礼 日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼	康熙十年に下庫理より南殿に儀礼場所を変更 雍正七年に御僅例御盆のみ廃止	儀礼開催場所の変更 一部廃止による縮小
	63十五夜	十五日の夜に、夜番の役人が御庭で拝礼を行う。御台所から御内原へ三日御酒が献上される（由・旧） 雍正七（一七二九）年に廃止される（球） 乾隆三十四（一七六九）年に復活する（球）	表・内双方の儀礼 中国系儀礼 共飲・飲食の儀礼	雍正七年に廃止 乾隆三十四年に復活	廃止された後、復活
	64赤飯丘登之事	赤飯の夜、柴差の夜に時の大屋子一人宛、奉神門・右掖門・美福門・島添（西）アザナに登り、城内の吉凶の兆しを見る。また、この夜は鐘を撞かない（由・旧）	表の儀礼		
	65柴指	柴指の日の早朝、御庭中央の浮道より桑やススキを指し、城内中にも指す。また中城御殿・聞得大君御殿・各御殿にも指す（由・旧） 御台所から御内原へ御佳例御盆が献上される。御佳例御盆は雍正七（一七二九）年に縮小される（球）	表の儀礼 日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼	雍正七年に御佳例御盆のみ廃止	一部廃止による縮小
九月	66九日	九日、国王が南殿に出御して三月三日と同じ儀式を行う。御台所から御内原へ御佳例御盆と同じ料理が献上される。円覚寺からは菊花が献上される（由） 康熙十（一六七一）年に南殿となる。それ以前は下庫理で実施していた（由） 御佳例御盆は、雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	表・内双方の儀礼 宗教儀礼（仏教） 日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼	康熙十年に下庫理より南殿に儀礼場所を変更 雍正七年に御僅例御盆のみ廃止	儀礼開催場所の変更 一部廃止による縮小

	67御祈念	九月に日を選んで正殿大庫理（二階）に聖家（真言宗）の僧を呼んで祈祷をさせる。内容は正月・五月の御祈祷と同じ（由）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教）		
	68麦初種蒔きの日は、玉城雨粒（雨辻）御嶽や、他の御嶽・火の神に勢頭・筑登之を派遣して御拝をさせる。同じ日に米の種子を拵え置き、諸間切村々で田植えに備える。三年に一度、聞得大君御殿で祭礼の後、首里殿内で、国王が鍬をうち、聞得大君が糸を紡ぐ儀礼を行う。康熙十二（一六七三）年に国王の行幸を取り止め百人物参親方が代参する（由・旧・女・球） 道光二十四（一八四四）年頃、国王行幸の復活が検討される（評）	表・内双方の儀礼 琉球固有信仰 農耕儀礼	康熙十二年に、国王行幸から百人物参親方代参に変更 道光二十四年に国王行幸の復活を検討。但し復活したか不明	変更
	69種子取	九月ないし十月の立冬の前後に各間切村々で稲の種子を蒔く（由・旧）	表の儀礼 農耕儀礼		
	70普天間御参詣	国王が普天間に参詣し、無病息災を祈願する。還幸時に龍福寺で先王神主に拝礼を行う（由・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（神道・仏教）		
十月	71一日更冬衣	十月一日より三月三十日の間、冬衣を着用する（由）	表の儀礼		
	72竈廻	十月一日より寒気が増し、火を多く使うので失火の用心のため竈を点検する（旧・女）	内の儀礼 宗教儀礼（神道）		
	73粟初種子	十月に王府が日を選んで諸間切に通達して粟、豆種子を畑に蒔かせる（由・旧）	表の儀礼 農耕儀礼		
	74上表渡	国王から中国皇帝へ上表する書簡（上表文）に琉球国王印を捺印して、渡唐する進貢使節団に渡す儀式（由・旧）	表の儀礼 中国系儀礼		
	75渡唐衆御茶飯	船子達が正殿御庭中央の浮道で綱を作り、おもろ親雲上達が「おもろ」を謡う。進貢使節団に料理・酒を賜い、国王謁見の儀式を行う（由・旧）	表の儀礼 中国系儀礼 琉球固有信仰 共飲・飲食の儀礼		
十一月	76新早植	十一月に王府が日を選んで諸間切に通達して稲の苗を植えさせる（由・旧）	表の儀礼 農耕儀礼		
	77冬至	冬至に御庭で北極を拝む儀式を行う。儀式の内容は正月元旦の朝拝御規式とほぼ同じ（由・旧・女）	表の儀礼 中国系儀礼 共飲・飲食の儀礼		
	78御照堂御拝	冬至の日に正月元旦の御照堂御拝と同じ儀式を行う。また御台所から御内原へ御佳例御盆と同じ料理と砂糖団子が献上される（由） 御佳例御盆は、雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	表・内双方の儀礼 宗教儀礼（仏教） 共飲・飲食の儀礼	雍正七年に御佳例御盆のみ廃止	一部廃止による縮小

	79御状開	南殿で薩摩から帰国した年頭使が薩摩側からの書状を捧げる。この時に国王に献上された酒のお流れを蔵衆・与力まで賜る。国王退出の後、茶も賜る（由・旧）	表の儀礼 日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼		
十二月	80向早植	十二月に王府が日を選んで諸間切に通達して稲の苗を植えさせる（由・旧）	表の儀礼 農耕儀礼		
	81仏名会	八日から九日まで北殿で真言衆の僧が相揃い経を読む。中日（九日）に国王が正殿下庫理に出御する場合もあり、その時は真言宗の僧が下庫理で儀式を行う（由・旧） 雍正六（一七二八）年に北殿から護国寺に会場を移す。	表の儀礼 宗教儀礼（仏教）	雍正六年に首里城北殿から護国寺に会場を移動。	儀礼開催場所の変更
	82鬼餅	大台所から御内原へ御嘉例御盆と餅が献上される。現在の鬼ムーチーにあたる（由・旧） 御嘉例御盆は、雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	内の儀礼 琉球固有 共飲・飲食の儀礼	雍正七年に御佳例御盆のみ廃止	一部廃止による縮小
	83掃煤之事	十五日以降、日を選んで首里城内の煤払いを行う（由・旧）	表の儀礼 日本系儀礼		
	84歳暮	二十七日に歳暮の御祝礼を行う。国王は南殿に出御する。国王に献上された酒のお流れを出仕の官員が賜る。国王退出の後、茶も賜る。また二十八日にも国王は南殿に出御して禅家・真言宗の官僧が出仕する儀式があり、僧達は茶を賜る（由・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教） 日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼		
	85年末の御年日	十二月の国王の誕生日と同じ日にちに大台所から御内原へ御嘉例御盆を献上する（由・旧） 御嘉例御盆は、雍正七（一七二九）年に廃止される（球）	内の儀礼 共飲・飲食の儀礼	雍正七年に御佳例御盆廃止	廃止
	86歳末配帙献上	二十二日及び二十三日以降に日を選んで円覚寺等の禅宗寺院で歳末の御祈念を三日行う。内容は正月に国王へ配帙を献上する行事と同じ（由・旧）	表の儀礼 宗教儀礼（仏教）		
	87天界寺年籠	三十日と冬至の前日に天界寺で天壇の御拝が行われる。三司官・御鎖側・正議大夫・長史・那覇官長等、唐之礼拝を行う（由・旧） 雍正七（一七二九）年に朝晨の演礼とし寺に宿泊する礼を止める（球）。	表の儀礼 宗教儀礼（仏教）	雍正七年に宿泊演礼から朝晨演礼に縮小	祭祀場所の変更
	88宮宮年籠	三十日の夜、波上・沖・末吉・天久・安里八幡・普天間の各神社に親雲上・筑登之等十七名の御拝人員を派遣して年籠を行い、国王の長寿・国土安全・五穀豊穣等が祈願される。 雍正七（一七二九）年に廃止される（由・旧・女）	表の儀礼 宗教儀礼（神道）	雍正七年に廃止	廃止

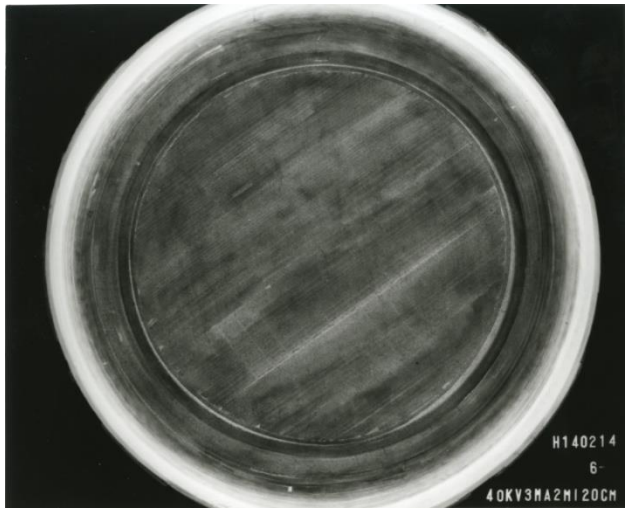
	89除夜御年玉餅並御嘉例御盆	三十日の夜に大美御殿から鏡餅が献上され、大台所から御内原へ御嘉例御盆が献上される（由） 御嘉例御盆は、雍正七（一七二九）年に縮小される（球）	内の儀礼 日本系儀礼 共飲・飲食の儀礼	雍正七年に御佳例御盆のみ廃止	一部廃止による縮小
	90御身葉民御願	国王の長寿を祈願するため、国王の親類の官員が正月に吉日を選んで願掛けをし、十二月末まで行う（由・旧）	表の儀礼		

凡例：本表の中で各史料を以下のように省略して表記した。
『琉球国由来記』＝由。『琉球国旧記』＝旧。『琉球国王家年中行事　正月式之内』＝式。『聞得大君御殿并御城御規式之御次第』＝聞。『女官御双紙』＝女。『球陽』＝球。『評定所文書』＝評

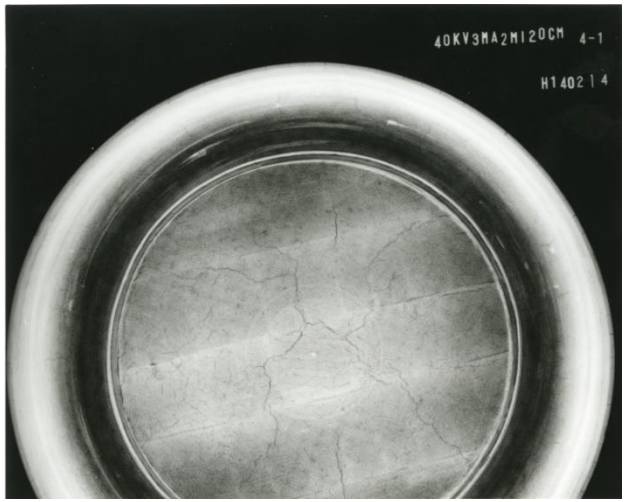
②琉球漆器の円形二段食籠の木地構造に関する考察

黒漆菊花鳥虫七宝繋沈金食籠
製作年代 15～16 世紀
外面の髹漆：黒漆　　加飾：沈金
沈金模様：菊・鳥・蝶・蜻蛉・虻・蟷螂・七宝繋・縦横線紋
久米島にある黒塗菊花鳥虫沈金丸外櫃（沖縄県指定有形文化財）と沈金仕様が酷似している。
沖縄美ら島財団所蔵
沖縄県指定文化財

朱漆吉字紋牡丹唐草七宝繋沈金食籠
製作年代：18～19 世紀
外面の髹漆：朱漆　加飾：沈金
沈金模様：牡丹・吉字紋・青海波紋・七宝繋紋
琉球国王尚家関係資料（那覇市蔵）：朱漆巴紋牡丹七宝繋沈金御籠飯（国宝）の沈金仕様と類似し、木地構造は、ほぼ同一である。
沖縄美ら島財団所蔵



黒漆菊花鳥虫七宝繋沈金食籠（甲盛・肩）



朱漆吉字紋牡丹唐草七宝繋沈金食籠（甲盛・肩）

朱漆巴紋牡丹唐草七宝繋沈金足付盆
沖縄美ら島財団所蔵

目視で確認された捲胎技法
足付盆修理の時に確認された。
土井菜々子氏撮影

八巻の後頭部
八巻の後頭部を覆う部位。薄い板をずらしながら人間の後頭部に沿うように成形されている。

伊是名玉陵　公事清明祭
右下に朱漆箔巴紋食籠の複製品が使用され、花米が身上段に直接入れられている。

現存する円形二段食籠（12 事例）について、透過 X 線調査・目視調査等により、①樹種・②髹漆・③加飾・④図案・⑤法量・⑥甲盛の構造・⑦蓋肩の構造・⑧蓋側面の構造・⑨身上段見込の構造・⑩身上段側面の構造・⑪身下段見込の構造・⑫身下段の側面の構造・⑬身尻の構造・⑭高台の構造の比較考察を行った。

・針葉樹系の木材を使っている。天明元（1781）年迄は鹿児島の船頭が自由に杉板を商売していた。天明元年以降、杉板販売に制限
・沈金仕様が 15～17 世紀の A タイプ（花鳥図中心）・18～19 世紀の B タイプ（家紋・牡丹唐草）に分かれるが、木地構造は 15～19 世紀迄、ほとんど変化がなく、捲胎・曲輪を使った複雑な構造。
・木地構造に大きな変化がないことから、A タイプと B タイプは同じ工房で伝統的に技術が継承されて製作されたことが分かる。
・A タイプは精緻な沈金仕様により中国漆器研究者から明代の中国漆器の可能性を指摘されていたが、琉球製と判明。
・沈金仕様の変遷が、花鳥図中心から巴紋のような国王家の家紋・牡丹唐草中心になることで女神官中心から男性官人中心の祭祀儀礼道具へと変化。
・課題として、捲胎技法の琉球伝播経路がまだ不明。おそらく中国か。
・現在、鍔が捲胎の丸盆・皿の類似した中国漆器と琉球漆器の事例を比較して捲胎技法のルーツが中国ではないか分析作業を始めている。

表1

琉球の円形二段食籠の髹漆・沈金加飾と木地構造の変遷

No.	資料名	画像	区分	樹種	外面髹漆	加飾	図案	法量	甲盛	蓋肩	蓋側面	身上段見込	身上段側面	身下段見込	身下段側面	身尻	高台	備考
1	黒漆菊花鳥虫七宝繋沈金食籠 （図版1）		A	針葉樹系	黒漆	沈金	菊・鳥・蝶・蜻蛉・虻・蟷螂・七宝繋・縦横線紋	高38.5×径33.1	ドーム形状の矧板構造（矧板に対し直角の刻線有）臍組無し・平矧	捲胎	曲輪	矧板構造・臍組無し・平矧	曲輪	矧板構造・臍組無し・平矧	曲輪	捲胎	曲輪	調査方法：透過X線・目視 久米島にある黒漆菊花鳥虫沈金外櫃（県指定文化財）と沈金仕様が酷似。 沖縄美ら島財団所蔵 沖縄県指定有形文化財
2	黒漆孔雀牡丹唐草沈金食籠 （図版13）		A	針葉樹系	黒漆	沈金	孔雀・牡丹・縦横線紋・山形波紋	高36.7×33.6	ドーム状の矧板構造 臍組無し・平矧	捲胎	曲輪	矧板構造・臍組無し・平矧	曲輪	矧板構造・臍組無し・平矧	曲輪	捲胎	曲輪	調査方法：透過X線・目視 浦添市美術館所蔵 浦添市指定有形文化財
3	黒漆牡丹唐草沈金食籠 （図版14）		A	針葉樹系・杉材の可能性が高い	黒漆	沈金	牡丹・縦横線紋	高29.5×径33.3（参考）	ドーム形状の矧板構造（矧板に対し直角の刻線有）臍組無し・平矧	捲胎	曲輪	欠損	欠損	矧板構造・臍組無し・平矧	曲輪	捲胎	曲輪	調査方法：透過X線・目視 身上段が欠損。 沖縄美ら島財団所蔵
4	黒漆葡萄栗鼠沈金食籠 （図版15）		A	針葉樹系か	黒漆	沈金	葡萄・栗鼠	高30.0×径34.5（参考）	ドーム状の矧板構造 臍組無し・平矧	捲胎	曲輪	欠損	欠損	矧板構造・臍組無し・平矧	曲輪	捲胎	曲輪	調査方法：目視 身上段が欠損。 沖縄美ら島財団所蔵
5	黒漆牡丹七宝繋沈金食籠 （図版16）		A	針葉樹系	黒漆	沈金	牡丹・七宝繋紋・縦横線紋・波線紋	高39.3×34.1	ドーム状の矧板構造 臍組無し・平矧	捲胎	曲輪	矧板構造・臍組無し・平矧	曲輪	矧板構造・臍組無し・平矧	曲輪	捲胎	曲輪	調査方法：透過X線・目視 沖縄美ら島財団所蔵 沖縄県指定有形文化財
6	朱漆吉字紋牡丹唐草七宝繋沈金食籠 （図版2）		B	針葉樹系	朱漆	沈金	吉字紋・牡丹・青海波紋・七宝繋紋	高37.3×径36.7	ドーム状の矧板構造（矧板に対し直角の刻線有）臍組無し・平矧	捲胎	引き曲げ	矧板構造・臍組無し・平矧	引き曲げ	矧板構造・臍組無し・平矧	引き曲げ	捲胎	引き曲げ	調査方法：透過X線・目視 朱漆巴紋牡丹七宝繋沈金御籠飯（尚家資料）の沈金仕様と類似し、木地構造は、ほぼ同一である。 沖縄美ら島財団所蔵

7	朱漆巴紋牡丹七宝繋沈金御籠飯 （図版17）		B	針葉樹系	朱漆	沈金	巴紋・牡丹・青海波紋・七宝繋紋	高38.5×径36.6	ドーム状の矧板構造 （矧板に対し直角の刻線有） 臍組無し・平矧	捲胎	引き曲げ	矧板構造・臍組無し・平矧	引き曲げ	矧板構造・臍組無し・平矧	引き曲げ	捲胎	引き曲げ	調査方法：透過X線・目視 国宝尚家資料 那覇市所蔵
8	朱漆巴紋牡丹唐草七宝繋沈金食籠 （図版18）		B	針葉樹系	朱漆	沈金	巴紋・牡丹・青海波紋・七宝繋紋	高37.6×径35.9	ドーム状の矧板構造 臍組無し・平矧	捲胎	曲輪（引き曲げの可能性有）	矧板構造・臍組無し・平矧	曲輪（引き曲げの可能性有）	矧板構造・臍組無し・平矧	引き曲げ	捲胎	引き曲げ	調査方法：透過X線・目視 今帰仁御殿旧蔵 沖縄県立博物館・美術館所蔵
9	朱漆家紋牡丹七宝繋箔絵食籠 （図版19）		B	針葉樹系	朱漆	箔絵	変一引両紋・牡丹・青海波紋・七宝繋紋	高37.5×径36.4	ドーム状の矧板構造 （矧板に対し直角の刻線有） 臍組無し・平矧	捲胎	引き曲げ	矧板構造・臍組無し・平矧	引き曲げ	矧板構造・臍組無し・平矧	引き曲げ	捲胎	引き曲げ	調査方法：透過X線・目視 沖縄美ら島財団所蔵
10	朱漆箔巴紋食籠 （図版10）		B	不明	朱漆	箔絵	巴紋	高35.0×径30.4	矧板構造か	捲胎	引き曲げか	矧板構造か	引き曲げか	矧板構造か	引き曲げか	捲胎	引き曲げか	調査方法：目視 伊是名村銘苅家所蔵
11	朱漆食籠 （図版11）		C	不明	朱漆	無し	無し	高18.8×径27.0 （参考）	欠損	欠損	欠損	挽物	挽物	挽物	挽物	挽物	挽物	調査方法：目視 本村家旧蔵 宮古島総合博物館所蔵
12	食籠 （図版12）		C	広葉樹系	ほぼ欠損 不明	欠損 不明	欠損 不明	高37.0×径31.7	挽物	挽物	挽物	挽物	挽物	挽物	挽物	挽物	挽物	調査方法：目視 かつて祭祀道具として使用。現在新規製作した道具に交代。 君南風殿内所蔵

③琉球国の御玉貫・御玉垂に関する考察

・現存する御玉貫 9 事例、蓋のみ現存 1 事例、古写真の御玉貫・御玉垂 4 事例、絵図資料に描かれた御玉貫・御玉垂 3 事例で比較考察

・御玉貫には、ガラス小玉 6 個繋ぎの A タイプとガラス小玉 4 個繋ぎの B タイプ、ガラス小玉 4 個繋ぎで格子状に繋いで編む C タイプに区分

・ガラス小玉 6 個繋ぎは奄美伝来の「玉ハベル」にも見られる。名嘉家御玉貫・尚家御玉貫（小）・鎌倉古写真中城御殿御玉貫 3 事例は 6 個繋ぎの古琉球期タイプ。図案が六弁花。

・ガラス小玉 4 個繋ぎは首里城御玉貫・浦美御玉貫・県博御玉貫・銘苅家御玉貫等 7 事例。銘苅家御玉貫は王府より下賜が同治 9（1870）年にあった基準資料。図案が巴紋の家紋中心。

・銘苅家御玉貫には紫色のガラス小玉使用。尚寅創設の宜野湾御殿家の御玉貫にも紫色のガラス小玉使用（鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』解説）。19 世紀末の特徴。尚家の御玉貫（小）（大）の蓋部分に紫色ガラス玉使用。身部分に紫色ガラス玉は無い。蓋と身の年代が違うことが明確に判明。特に御玉貫（小）の身は 6 個繋ぎの古琉球期タイプ。

・ガラス小玉 6 個繋ぎから 4 個繋ぎへ、この変遷とともに図案が六弁花中心から巴紋・家紋中心となる。祭祀儀礼道具の保管管理も女神官から御道具當等に変化。使用は下庫理當等の男性官人中心となる。

・御玉貫は中国から移住した人物が製作を伝えたとの伝承があり、ガラス小玉の鉛同位体分析では中国華南省由来の鉛を使用した鉛ガラスが多く使われたとの分析結果がある。しかし類似したガラス小玉で覆った酒器の事例は中国にも他地域にも今のところ確認されていない。

・課題→ガラス小玉を連ねた装飾品は世界各地に事例はあるが、酒器のような容器を覆った事例は無い。→インドの現代工芸品には事例有。
前近代の事例の確認が必要。琉球の御玉貫の伝播ルートの解明の手がかりとなる。

名嘉家伝来の御玉貫
伊是名村

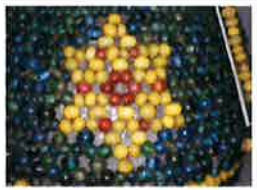
緑字巴紋御玉貫
美里御殿伝来
沖縄県立博物館・美術館所蔵

黄色地巴紋御玉貫一対
銘苅家（伊是名村）

尚家御玉貫（小）蓋
那覇市歴史博物館

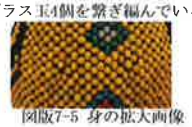
現存する御玉貫からみた製作年代の変遷（暫定）

No.	区分	資料名	画像	使用目的の推定・伝来情報・形状の特徴等	瓶本体の錫・鉛の比率	ガラス玉の色
1	A	緑地御玉貫一対	 図版1 「緑地御玉貫一対」（名嘉家伝来） 図版1-1 底裏に尾の長い巴紋を鋳出。 図版1-2 高台はガラス玉4個を繋ぎ編んでいる。 地色の緑色は青色・薄緑色・濃緑色等不揃い。 図版1-3 身胴上部はガラス玉6個を繋ぎ編んでいる。 地色の緑色は不揃い。	①使用目的 伊平屋阿母加那志から国王・王妃・聞得大君等への献上酒を入れる祭祀儀礼道具。 ②技術的な特徴 身の地色の緑色は濃緑色と薄緑色、青色透明が混在し、ガラス玉の形状、寸法は不揃いである。 蓋側面・身はガラス玉6個を繋ぎ編んでいる。高台はガラス玉4個を繋ぎ編んでいる。 ガラス玉6個繋ぎの編み方は奄美の玉ハベル（参考1等）の一部、御玉貫No.2と身胴上部と類似している。 （製作上限の根拠） 身胴上部に六弁花紋（小）4、身胴張部に六弁花紋（大）4の構成は御玉貫No.2と玉の配色は違うが類似。 蓋・房飾は破損がひどく欠損した部分あり。おそらく島内で破損と修理を繰り返したと思われる。 房飾のみ方形の編み方を行っており、鎌倉古写真の宜野湾御殿の御玉貫No.14と編み方が類似して見える。房飾のみ後世修理により編み方が改変した可能性も考えられる。 ③文献・伝来等からの考察 名嘉家は伊平屋阿母加那志職を代々娘継ぎで輩出している。 伊平屋阿母加那志は康熙6（1667）年までは隔年で首里城に上国していた。 17世紀前半から中期まで宮古大阿母・八重山大阿母も隔年で首里上国しており、御玉貫を使った献上儀礼を行っていた。伊平屋阿母加那志の首里上国時の献上儀礼でも御玉貫を使用していたと思われ、康熙6年以前から御玉貫を所持していたと思われる。 伊平屋阿母加那志が首里に上国し就任儀礼を行ったのは康熙14（1675）・45（1706）年。17世紀中期～18世紀初頭の段階で既に王府から御玉貫を下賜され使用していたと思われる（製作下限）。 **推定される製作年代** 16世紀後半～18世紀初頭 御玉貫No.1は、ガラス玉6個繋ぎで製作されている玉ハベルとの製作仕様の類似性から製作上限は16世紀後半まで遡ると思われる。 伊平屋阿母加那志は隔年で首里に上国していたが康熙6（1667）年に停止。それまで上国時には御玉貫を用いた国王等への献上事例があった。但し国王の慶事と阿母加那志職の代替り時の謝恩のみ渡海を許される。 『女官御双紙』（康熙45（1706）～52（1713）年編纂）に伊平屋阿母加那志の就任儀礼で国王・王妃・聞得大君に御酒を献上する道具として御玉貫の使用が記録されている。この就任儀礼は『女官御双紙』編纂直近の康熙14（1675）年か、康熙45（1706）年と考えられる。 雍正4（1726）年、慶事や代替り時の謝恩渡海も停止。御玉貫使用の献上儀礼は無くなる。その後王府から阿母加那志へ御玉貫等の下賜は無かったと考えられる。『女官御双紙』の御酒献上が御玉貫No.1であれば製作年代の下限は康熙45年となり、17世紀後半から18世紀初頭に製作されたものと思われる。 ただし、玉ハベルとの類似性から製作上限の16世紀前半の可能性が高いと考える。	錫43%：鉛57%程度 鉛ガラス以外の材質 青色・乳白色系ガラスに鉛ガラスではない材質存在 蓋の有無 蓋残存 地色 蓋：緑色 身：緑色 法量 総高32.0 身高27.427.5 口径5.45 胴径10.3～10.5 胴・高台接合部径 7.5～7.7 高台高4.3 底径9.85	青色透明・黒色・濃緑色・薄緑色・白色・乳白色・黄色・赤色 底裏の紋章等 底裏に尾の長い巴紋を鋳出する。 所蔵等 名嘉家（伊是名）

No.	区分	資料名	画像	使用目的の推定・伝来情報・形状の特徴等	瓶本体の錫・鉛の比率	ガラス玉の色
2	身：A 蓋：B	御玉貫（小）	 図版2 「御玉貫（小）」 図版2-1 底裏に尾の長い三巴紋を鋳出。  図版2-2 身胴上部の拡大画像 ガラス玉6個を繋ぎ編んでいる。 地色の緑色は水色・青緑色等不揃い。 図版2-3 高台はガラス玉4個を繋ぎ編んでいる。 地色の緑色は水色・青緑色等不揃い。 図版2-4 房飾には紫色のガラス玉を使用。	①使用目的 王府祭祀もしくは首里周辺の高級神女の儀礼道具として使用されたものと思われる。 ②技術的な特徴 身の地色の緑色は緑色と青緑色が混在し、ガラス玉の形状、寸法は不揃いである。 黒色のガラス玉からﾏﾝｶﾞﾝ検出。 蓋側面・房はガラス玉4個を繋ぎ編んでいる。高台はガラス玉4個を繋ぎ編んでいる。 身胴上部はおおよそガラス玉6個を繋ぎ編んでいる。 ガラス玉6個繋ぎの編み方は奄美の玉ハベル（参考2）や御玉貫No.1の身胴上部と類似している。 身胴上部に六弁花文（小）4、身胴張部に六弁花文（大）4の構成は御玉貫No.1と玉の配色は違うが類似。 身胴下部の黄色廻線の下部は不定形に繋ぎ編んでいる。 房飾に紫色のガラス玉を使用。銘苅家伝来の御玉貫と同じく19世紀末期の特徴を有している。 蓋側面・房と身胴上部のガラス玉の繋ぎ方が異なり、房には19世紀末期の特徴である紫色のガラス玉の使用もあることから蓋と身は別の御玉貫だったと思われる。 ③文献・伝承等からの考察 尚家伝来の御玉貫であるため、王府の祭祀儀礼で使用された道具と思われるが、身は巴紋が無いことから国王家の祭祀儀礼道具ではなく首里周辺の高級神女の祭祀儀礼道具として使用されたものが後年尚本家に集積された可能性も考えられる。 **推定される製作年代** 身：16世紀後半～18世紀初頭 身は名嘉家の御玉貫No.1と編み方が類似していることから製作時期が近いと思われるため、16世紀後半が製作上限で、製作下限は名嘉家の御玉貫No.1の18世紀初頭頃か。 ただし、玉ハベル・御玉貫No.1のガラス玉の編み方の類似性から16世紀後半の製作上限の可能性が高いと思われる。 蓋：19世紀後半 蓋は製作時期が明確な銘苅家の御玉貫No.8や、宜野湾御殿の御玉貫No.13と同じく紫色のガラス玉が使用されているので1870年代前後に製作されたものと思われる。	錫63%：鉛37%程度 鉛ガラス以外の材質 全て鉛ガラス 蓋の有無 蓋残存 但し蓋と身は別の御玉貫だったと思われる。 地色 蓋：緑色 身：緑色 法量 総高31.7 身高27.4 口径5.4 胴径11.2 胴・高台接合部径7.7 高台高4.3 底径9.7	緑色・青緑色・水色・透明・黄色・赤色・白色・黒色・紫色 底裏の紋章等 底裏に巴紋を鋳出する。 所蔵等 那覇市歴史博物館 尚家資料

No.	区分	資料名	画像	使用目的の推定・伝来情報・形状の特徴等	瓶本体の錫・鉛の比率	ガラス玉の色
5	B	玉貫錫瓶	 図版5 「玉貫錫瓶」 図版5-1 底裏に五瓜の巴紋を点刻。墨書で「美里御殿」とある。 図版5-2　身胴上部の拡大画像 ガラス玉4個を繋ぎ編んでいる。	①使用目的 美里（大宜見）御殿の儀礼道具として使用されたものと思われる。 ②技術的な特徴 胴上部に五瓜の中に巴紋有り。底裏にも五瓜の中に巴紋を点刻で表現している。 底裏の五瓜巴紋が鋳出ではなく魚々子打ちで他の底裏に巴紋がある御玉貫と仕様に相違がみられる。 身の地色の緑色は緑色・青色・青緑色が混在する。ガラス玉の形状、寸法も不揃いである。 身頸部の白色の廻線上部のガラス玉は不定形に繋ぎ編んでいる。 身胴部・高台はガラス玉4個を繋ぎ編んでいる。 ③文献・伝承等からの考察 五瓜の中に巴紋は大宜見御殿の紋章の図様と一致する。大宜見御殿の旧称は美里御殿である。 尚貞王第四男尚紀美里王子朝禎（1682～1711）が美里御殿創設時の17世紀末～18世紀初頭頃が製作の上限と思われる。 その後、美里御殿は五世朝安の時に大宜見間切の按司地頭に転封。以後、大宜見御殿を称す。製作下限は大宜見間切転封前と思われる。但し御玉貫の様な祭器は御殿創設時に製作する可能性が高いため製作上限と仮定した時期ではないかと考える。 底裏の巴紋の製作仕様の違いから、王府下賜の御玉貫ではなく、美里御殿が御殿家の祭祀儀礼のために製作した可能性があると思われる。	錫45%：鉛55%程度 鉛ガラス以外の材質 青色～緑色系ガラスに鉛ガラスではない材質存在	乳白色・透明・白色・緑色透明・緑色・青緑色・青色・水色・黒色・黄色・赤色 底裏の紋章等 底裏に五瓜の中に巴紋の紋様を魚々子打ちしている。 その上から美里御殿と墨書有。
				推定される製作年代 17世紀末～18世紀前半 製作上限 17世紀末～18世紀初頭 (1690年代後半～1711年以前か) 製作下限 18世紀前半頃か ※五世朝安、大宜見間切転封前か	蓋の有無 蓋無し 地色 身：緑色 法量 身高28.6 口径5.3 胴径10.7 胴・高台接合部径7.7 高台高4.5 底径10.4	所蔵等 沖縄県立博物館・美術館 美里御殿伝来

No.	区分	資料名	画像	使用目的の推定・伝来情報・形状の特徴等	瓶本体の錫・鉛の比率	ガラス玉の色
6	B	錫製五色玉瓶子	 図版6 「錫製五色玉瓶子」 図版6-1 底裏に乙字紋を点刻。 図版6-2 身上部の拡大画像 ガラス玉4個を繋ぎ編んでいる。 他の事例よりガラス玉の長辺を縦に使っている部分が多い。 図版6-3　高台の拡大画像 ガラス玉4個を繋ぎ編んでいる。	①使用目的 士族の祭祀儀礼道具として使用されたものと思われる。 ②技術的な特徴 胴上部に丸に乙字紋有り。 美里御殿の御玉貫と同様に底裏の紋章は鋳出した仕様ではなく魚々子打ちで表現している。王府から下賜された御玉貫ではなく、首里系士族が自家の祭祀のため製作したものかと思われる。 高台部分の地色が白色となっており、他の御玉貫と配色構成に相違が見られる。 ガラス玉は孔方向に扁平な球形が多く、球形とは言い難い歪な形状のものもある。一部に形成時の巻上痕があるガラス玉もある。 黒色のガラス玉からﾏﾝｶﾞﾝ検出。紫色ガラス玉未使用。 身頸部の黄色廻線上部は不定形に繋ぎ編んでいる。 地色の緑色ガラス玉の色調は御玉貫No.1・御玉貫No.2の身、御玉貫No.3～5に較べて均質である。 身・高台はガラス玉4個繋ぎで編んでいるが、扁平なガラス玉の長辺を縦に編んでいる箇所が多々ある。 御玉貫は、地色が緑色ないし黄色で統一される事例が多いが身頸部・胴上部が緑色。胴下部が黒色。高台が白色という配色となっている。 ③文献・伝承等からの考察 乙字紋が家紋の士族については不明。伝来情報も無し。 胴上部の黄色ガラス玉で描かれた乙字紋、底裏の魚々子打ちの乙字紋から王府より下賜された御玉貫ではなく、王府祭祀を模倣するようになった首里系士族が自家の祭祀のため製作したものとかと思われる。	錫60%：鉛40%程度 鉛ガラス以外の材質 全て鉛ガラス	白色・乳白色・緑色・青緑色・黒色・黄色・赤色 底裏の紋章等 底裏に丸に乙字紋を魚々子打ちしている。
				推定される製作年代 18世紀中期以降 御玉貫No.1～5の色調が不均質な緑色ガラス玉ではなく緑色の色調が均質になっている。 御玉貫No.3・No.4・No.5に較べて胴下部の地色が黒色であったり、高台地色が白色であるなど、これまでの御玉貫に較べて配色の構成が異なっている。御玉貫No.5までの王府が製作して御殿家に下賜したような御玉貫ではなく、王府祭祀の文化を士族層が模倣するようになり製作された御玉貫と思われ、緑色ガラス玉が均質な仕上がりになった変化も含めて18世紀中期以降の製作と思われる。	蓋の有無 蓋無し 地色 頸部・胴上部：緑色 胴下部：黒色 高台：白色 法量 身高27.0～27.2 口径5.2 胴径10.27～10.3 胴・高台接合部径7.2 高台高4.5 底径10.4	所蔵等 沖縄県立博物館・美術館

No.	区分	資料名	画像	使用目的の推定・伝来情報・形状の特徴等	瓶本体の錫・鉛の比率	ガラス玉の色
7	B	御玉貫 （大）	 図版7 「御玉貫（大）」 図版7-2御玉貫（大）身頸部・胴上部菱形紋・胴下部鋸歯紋の青色ガラス玉、胴上部菱形紋・高台下部の緑色ガラス玉が明確に使い分けて使用されている。 図版7-1 底裏に尾の長い巴紋を鋳出。 図版7-3 蓋頂部に紫色のガラス玉を使用。 図版7-4　蓋側面の拡大画像 ガラス玉4個を繋ぎ編んでいる。  図版7-5 身の拡大画像 ガラス玉4個を繋ぎ編んでいる。	①使用目的 蓋は王府祭祀若しくは御殿家の儀礼道具として使用されたものと思われる。 身は王府祭祀の儀礼道具として使用されたものと思われる。 ②技術的な特徴 蓋側面・房はガラス玉4個を繋ぎ編んでいる。 身上部・高台はガラス玉4個を繋ぎ編んでいる。 身胴下部の赤色廻線の下部は不定形に繋ぎ編んでいる。 蓋の地色は緑色、身の地色は黄色と蓋と身で相違している。蓋と身は別の御玉貫だったと思われる。 御玉貫№1、御玉貫№2の身、御玉貫№3～5は水色から緑色と地色が不均一であるが、御玉貫№7は頸部の菱形紋大、胴上部の菱形紋小、胴下部鋸歯紋内に青色ガラス玉、胴上部の菱形紋小、高台下部に緑色ガラス玉が施される。明らかに緑色と水色のガラス玉の色調が区別して使用している。緑色ガラス玉の製作に関して不均一な色調変化の課題を克服して、緑色・青色を識別して製作・使用することができるようになったものと思われる。 ③文献・伝承等からの考察 尚家伝来の御玉貫であるため、王府の祭祀儀礼で使用された道具であると思われる。しかし蓋は丸に巴紋なので御殿家等で使用された御玉貫の蓋が近代以降、尚本家に集積された可能性もある。	未調査 鉛ガラス以外の材質 未調査 蓋の有無 蓋残存 但し蓋と身は別の御玉貫だったと思われる。 地色 蓋：緑色 身：黄色 法量 総高35.4 身高30.7 口径5.4 胴径11.5 胴・高台接合部径7.7 高台高5.6 底径11.2	黄色・赤色・緑色・水色・青色・紫色・白色・黒色・透明 底裏の紋章等 底裏に巴紋を鋳出する。 所蔵等 那覇市歴史博物館 尚家資料
推定される製作年代				身：18世紀中期～19世紀前半 緑色と水色ガラス玉を明確に使い分けしており、緑色ガラス玉の色調が不均一な御玉貫№1～5（16世紀後半～18世紀前半）より後世の製作で、18世紀前半以降、紫色のガラス玉は未使用のため19世紀後半以前と思われる。 『圖帳　當方』（書写年代1839年。旧『圖帳』の記録からすると18世紀に遡る）に黄色地らしき御玉疋や、尚泰王元服時（1857年）に「黄御玉貫」使用記事があることと、緑色と水色ガラス玉を使い分けて使用するようになっていることから少なくとも18世紀中期以降から19世紀前半には御玉貫№7のような黄色地の御玉貫が製作されていたと思われる。 蓋：19世紀後半 蓋に紫色のガラス玉が有り。伝来が明確な銘苅家の御玉貫№8（製作下限：1870年）・宜野湾御殿の御玉貫№13（製作上限：1875年）にも紫色のガラス玉が使用されている。蓋の製作時期は19世紀後半頃と思われる。		

No.	区分	資料名	画像	使用目的の推定・伝来情報・形状の特徴等	瓶本体の錫・鉛の比率	ガラス玉の色
8	B	黄色地巴紋 御玉貫 一対	 図版8 「黄色地巴紋御玉貫一対」 図版8-2 身胴部に編まれた巴紋 黒色のガラス玉で4個繋ぎで編んでいる。 図版8-1 底裏に尾の長い巴紋を鋳出。 図版8-3 蓋頂部・身頸部の紫色のガラス玉 蓋・身の双方に紫色のガラス玉が使用されている。	①使用目的 清明祭等の祭祀儀礼道具として王府から銘苅家に下賜される。 ②技術的な特徴 ガラス玉は色調にばらつきがあり、黒玉には朱の筋が認められる。水色や白色にも筋がみられる。 身頸部の赤色廻線上部、身胴部の赤色廻線下部はガラス玉6個前後を不定形に繋ぎ編んでいる。身胴部・高台はガラス玉4個を繋げて編んでいるが、扁平なガラス玉の長辺を縦にして編んでいる箇所が多々ある。 蓋頂部・身頸部に紫色のガラス玉が使用されている。伊是名銘苅家の御玉貫は、王府から下賜された時期が明確なことから紫色のガラス玉が19世紀後半に製作された御玉貫の特徴になると思われる（稲福2011）。 ③文献・伝来等からの考察 『玉御殿御道具帳』に記録があるため製作下限が同治9（1870）年と明確な記録が残され、御玉貫の基準資料となる。	錫53%：鉛47%程度 鉛ガラス以外の材質 青色系ガラスに鉛ガラスではない材質存在 蓋の有無 蓋残存 地色 蓋：黄色 身：黄色 法量 総高35.5 身高30.1 口径5.4～5.5 胴径11.5～11.6 胴・高台接合部径8.2 高台高4.5～4.7 底径12.2	水色・紫色・黒色・緑色・赤色・白色・黄色 底裏の紋章等 底裏に尾の長い巴紋を鋳出する。 所蔵等 銘苅家（伊是名）
推定される製作年代				19世紀後半 同治9（1870）年頃		

古写真・絵図にみえる御玉貫・御玉垂の図像

No. 11

画像

図版13 「錫製酒瓶御玉貫」

図版13-1 左右のガラス玉配色が違った蓋
頂部と蓋側面境界のガラス玉の明度が異なる。
蓋の房飾も左右配色が違っている。
ガラス玉４個繋ぎ。巴紋が編まれている。

撮影場所：中城御殿　撮影者：鎌倉芳太郎

区分：　B　所蔵：沖縄県立芸術大学

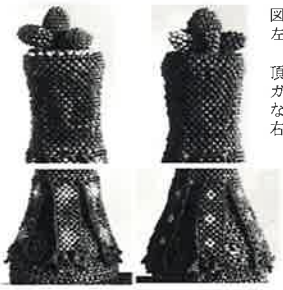
画像・伝来等からの情報

①ガラス玉の彩色
不明
②図案
蓋上部に苺状のつまみ（中央に1つ。周囲に四つか）。蓋上部のつまみの下方に廻線があるが、右側が明度の明るいガラス玉で、左側が明度が暗いガラス玉か廻線がない可能性もある。蓋側面に巴紋。房の付け根部に明度の明るいガラス玉で廻線。房はガラス玉4個に明度の明るい玉を巡らした大きなひし形図案とガラス玉1個に明度の明るい玉を巡らした小さなひし形図案を交互に配置。
身上部に巴紋。身胴部に廻線があり、下部に鋸歯模様。身と高台の接合部に明度の暗いガラス玉で廻線有りか。
高台図案は判別つかず。高台中央に小さいひし形模様と最下部に廻線有りか。
③編み方
ガラス玉4個を繋げて編んでいる。
④その他
下部の御菓子盆（台盆）は浮彫箔置牡丹唐草紋台。

No. 12

画像

図版14 「錫製酒瓶御玉貫」



図版14-1
左右のガラス玉配色が違った蓋。
頂部と蓋側面境界のガラス玉の明度が異なる。蓋の房飾も左右配色が違っている。

図版14-2
蓋はガラス玉4個繋ぎ。

図版14-3
身は蓋飾に覆われ明確ではないが、ガラス玉6個繋ぎに見える。欠損してない部分でも瓶の素地が見える。6個繋ぎの御玉垂№2も同じように瓶素地が見える。

撮影場所：中城御殿　撮影者：鎌倉芳太郎

区分：　身：A　蓋：B　所蔵：沖縄県立芸術大学

画像・伝来等からの情報

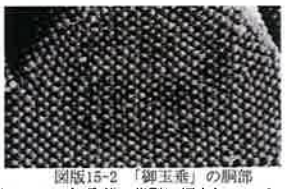
①ガラス玉の彩色
不明。
②図案
蓋上部に苺状のつまみ（中央に一つ。周囲に五つか）。蓋上部のつまみの下方に廻線があるが、左側が明度が暗いガラス玉か廻線がない可能性もある。右側が明度の明るいガラス玉。
蓋側面に巴紋。房の付け根部に明度の暗いガラス玉で廻線有りか。房飾はガラス玉1個に明度の明るいガラス玉4個を廻らしたひし形を三つ連ねる。図案構成は類似しているが房飾の菱形紋も左右でガラス玉の明度が異なるため配色が異なると思われる。
身上部の図案は不明。巴紋のような紋章では無いようである。身胴部に廻線があり、下部に鋸歯模様。身と高台の接合部に明度の暗いガラス玉の廻線有りか。
高台図案は判別つかず。高台中央に小さいひし形模様と最下部に廻線有りか。
③編み方
蓋はガラス玉4個を繋げて編んでいるか。
身はガラス玉6個繋ぎで編んでいるようである。胴部は編みの密度が広く瓶素地が見える。御玉垂№2と類似している。
④その他
下部の御菓子盆（台盆）は朱塗沈金台盆。
胴部に編みが解かれガラス玉が欠損している部分有。
法量　総高32.5　胴径11.0　胴・高台接合部径8.2　底径9.8

No. 13

画像

図版15 「錫製酒瓶御玉垂」

図版15-1 「御玉垂」の頂部
苺様の突起物装飾は欠損。芯部分らしき突起が残存。



図版15-2 「御玉垂」の胴部
ガラス玉４個繋ぎで菱型に編まれている。胴部に変紋ではない巴紋が編まれている。

撮影場所：中城御殿　撮影者：鎌倉芳太郎

区分：B　所蔵：沖縄県立芸術大学

画像・伝来等からの考察

①ガラス玉の彩色
不明。
②図案
蓋房は明度の暗いガラス玉4個を明度が若干明るいガラス玉を廻らしひし形図案を連続させているか。房の両脇は明度の明るいガラス玉を継いでいる。鶴首部に明度の明るいガラス玉を外円とした円紋。円内部の模様は判別できない。身上部に変紋ではない巴紋。身胴下部に廻線。廻線下部に花弁のような図案。高台図案は判別つかず。最下部に廻線有りか。
③編み方
大部分はガラス玉4個を菱形に繋げて編んでいる。身胴下部の花弁のような図案部分に不定形な編み方がある。蓋は頂部の突起物が欠損していると思われる。
④その他
『混効験集』に「玉だれおむきよへん　美御前揃玉すきつる御瓶」とあり、「玉だれおむきよへん」とは、「玉だれ」はガラス玉が垂れた様子で、「おむきよへん」は、『混効験集』の別項目に「御瓶の惣名なり」とあるので、小瓶の敬語である。
「美御前揃玉すきつる御瓶」の「美御前揃」とは美御前揃道具の一つで、「玉すき」はガラス玉に糸を通した（貫いた）装飾を行った「つる御瓶」。つる瓶とは弓状の取っ手が付いた水差状の酒器のこと。鎌倉古写真に画像が残る中城御殿の「御玉垂」の形状と一致する。
法量　総高32.0※　胴径16.0か　幅8.6　高台高3.9　底径9.1
※画像に残る蓋・身の総高。蓋は頂部の突起物が欠損している可能性があり、本来の総高はさらに高かったと思われる。

No. 14

画像

図版16 宜野湾御殿の「御玉貫」

図版16-1
宜野湾御殿の「御玉貫」と「錫製酒盃」・「御籠飯」

図版16-2
「御玉貫」の房飾・胴部
ガラス玉4個繋ぎで格子状に編まれている。

撮影場所：宜野湾御殿　撮影者：鎌倉芳太郎

区分：C　所蔵：沖縄県立芸術大学

画像・伝来等からの考察

①ガラス玉の彩色
「錫製の酒瓶を緑、黄、赤、藍、紫、白、黒の玉を糸に貫いてその胴部を包み、同様の玉で蓋を掛け」とある（鎌倉1982）。
鎌倉は紫色のガラス玉の使用を記録している。宜野湾御殿の創設時期と、同じく紫色のガラス玉が使用された伊是名銘苅家の御玉貫の下賜時期から、紫色のガラス玉使用の御玉貫は19世紀後半の特徴と思われる（稲福2011）。
②図案
蓋上部に苺状のつまみ（中央に一つ。周囲に五つか）。蓋側面の図案は不明瞭、房中央の明度の明るいガラス玉4個で菱形紋有り。
身上部の図案も不明瞭。身胴下部に明度の暗い廻線。身と高台の接合部に明度の明るい廻線有り。接合部の廻線から身胴部の廻線に届かない鋸歯模様有り。
高台中央に明度の明るいガラス玉（4個か）による菱形紋。最下部に明度の暗いガラス玉の廻線有りか。
③編み方
蓋側面・房飾・身上部・高台の編み方はガラス玉を縦横に格子状に編み隙間が大きく錫瓶素地が見える。この格子状の編み方は「朱漆竹虎連珠沈金螺鈿座屏」（浦添市美術館所蔵）の編み方に類似している。
④その他
尚貞は光緒元（1875）年に宜野湾按司となり御殿家を創設。御殿家創設時に御玉貫を含めた三御飾道具が揃えられたとすれば製作上限は光緒元年となる。
法量　総高33.8　高台高5.8　底径11.2※
※底径について、鎌倉芳太郎資料集（ノート篇）第一巻では宜野湾御殿の御玉貫の底径に「19.2」とルビを振っているが原書を見ると11.2と書いていると思われる。

御玉貫・御玉垂の製作推定年代順一覧

区分	資料名	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	製作推定年代	編み方	ガラス玉 色彩の特徴	身法量の比較	資料の状態	製作年代の根拠等
A	No.1緑地御玉貫一対					16世紀後半～ 18世紀初頭	蓋側面：6個繋ぎ 胴：6個繋ぎ 高台：4個繋ぎ	地色：青色透明・濃緑色・薄緑色・青色 黒色・白色・乳白色・黄色・赤色	身高27.4～5 口径5.45 胴径10.3～5 底径9.85	現存	奄美伝来のタマハベルと同じガラス玉6個繋ぎ。製作技術は古琉球期由来。
A	No.2御玉貫（小）身					16世紀後半～ 18世紀初頭	蓋側面：6個繋ぎ 胴：6個繋ぎ 高台：4個繋ぎ	地色：緑色・青緑色・水色 透明・黄色・赤色・白色・黒色	身高27.4 口径5.4 胴径11.2 底径9.7	現存	蓋は製作年代別 奄美伝来のタマハベルと同じガラス玉6個繋ぎ。製作技術は古琉球期由来。
A	参考1 タマハベル（玉ホベル）					16世紀～ 17世紀初頭	本体：おおよそ6個繋ぎ	地色：青色・水色・緑色 赤色・黄色・黒色。水晶玉（透明）・勾玉（黒色）		現存	奄美伝来、島津の琉球侵攻以前に王府より下賜と思われる。
A	No.12錫製酒瓶御玉貫 身					16世紀後半～ 18世紀初頭	胴：6個繋ぎ 高台：4個繋ぎ	不明 不明	身高未計測 胴径11.0 底径9.8	古写真 中城御殿旧蔵	蓋は製作年代別 奄美伝来のタマハベルと同じガラス玉6個繋ぎ。製作技術は古琉球期由来。
B	No.3御玉貫（身のみ）					17世紀中期	胴：4個繋ぎ 高台：4個繋ぎ	地色：薄緑色・青色・緑色・水色 黒色・赤色・黄色・乳白色・白色	身高26.6～8 口径5.1～2 胴径10.6～9 底径10.2	現存	蓋欠 琉球寄進（1649・53）の日光東照宮の「玉灯籠」のガラス玉の形状・色調が類似。
B	No.4緑地巴紋御玉貫（身のみ）					製作上限 17世紀後半 （1671） 製作下限 19世紀後半	胴：4個繋ぎ 高台：4個繋ぎ	地色：青色・濃緑色・薄緑色 透明・白色・乳白色・黄色・赤色	身高27.5 口径4.97 胴径11.0 底径9.57	現存	蓋欠 宜野湾王子朝義、宜野湾御殿創設時（1671）下賜か（製作推定上限が有力）。
B	No.5玉貫錫瓶（身のみ）					製作上限 1690年代～1711年以前 製作下限 18世紀半ば頃か	胴：4個繋ぎ 高台：4個繋ぎ	地色：緑色透明・緑色・青緑色・青色・水色 乳白色・透明・白色・黒色・黄色・赤色	身高28.6 口径5.3 胴径10.7 底径10.4	現存	蓋欠 美里王子朝禎（1682～1711）、美里御殿創設時に製作か（製作推定上限が有力）。
B	No.10黒漆螺鈿采配（三ツ巴紋御玉貫の蓋付）					17世紀後半～18世紀中期	蓋側面：4個繋ぎ	地色：緑色（半透明）・薄緑色（半透明） 黄色（不透明）・赤色（半透明）・白色（不透明）・黒色		現存	蓋のみ。身欠。
B	No.6錫製五色玉瓶子（身のみ）					18世紀中期以降	胴：4個繋ぎ 高台：4個繋ぎ	地色：緑色・青緑色 No.3～5より青～緑色のばらつき無し 白色・乳白色・黒色・黄色・赤色	身高27.0～2 口径5.2 胴径10.27～3 底径10.4	現存	蓋欠
B	No.12錫製酒瓶御玉貫 蓋					17世紀中期～19世紀後半	蓋側面：4個繋ぎ	不明 不明		古写真 中城御殿旧蔵	身は製作年代別 Bタイプ（4個繋ぎ）のため17世紀中期以降。ガラス玉配色不明のため下限不明。近世琉球末期か。

B	№12錫製酒瓶御玉垂		17世紀中期～19世紀後半	蓋側面：4個繋ぎ 胴：4個繋ぎ 高台：4個繋ぎ	不明 不明	総高32.0 胴径16.0 底径9.1	古写真 中城御殿旧蔵	『混効験集』（18世紀初頭編纂）に御玉垂に関する記述有り。 Bタイプ（4個繋ぎ）のため17世紀中期以降。ガラス玉配色不明のため下限不明。少なくとも近世琉球末期か。
B	№7御玉貫（大）身		18世紀中期～19世紀前半	胴：4個繋ぎ 高台：4個繋ぎ	地色：黄色 赤色・緑色・水色・青色・白色・黒色・透明	身高30.7 口径5.4 胴径11.5 底径11.2	現存	蓋は製作年代別
B	№8黄色地巴紋御玉貫一対		同治9（1870）年頃	蓋側面：4個繋ぎ 胴：4個繋ぎ 高台：4個繋ぎ	地色：黄色 水色・紫色・黒色・緑色・赤色・白色	身高30.1 口径5.4～5 胴径11.5～6 底径12.2	現存	同治9（1870）年、王府より銘苅家下賜。 下賜時期が明確なため、基準資料と位置付けられる。
B	№2御玉貫（小）蓋		蓋：19世紀後半	蓋側面：4個繋ぎ	地色：緑色 黄色・黒色・紫色・赤色		現存	身は製作年代別 基準資料の№8・№13と同じ紫色のガラス玉が使用されている。
B	№7御玉貫（大）蓋		蓋：19世紀後半	蓋側面：4個繋ぎ	地色：緑色 黄色・赤色・白色・紫色・水色		現存	身は製作年代別 基準資料の№8・№13と同じ紫色のガラス玉が使用されている。
C	参考2 朱漆竹虎連珠沈金螺鈿座屏		19世紀前半～19世紀後半	格子状4個繋ぎ	白色・白色（半透明） 黄色・薄黄色・黒色・赤茶色・黄土色・青色		現存	津軽家旧蔵 図案の虎図が王府の工房絵師の図案と類似。 木枠の沈金が18～19世紀の琉球沈金の典型例
C	№14御玉貫（宜野湾御殿）		光緒元（1875）年頃	格子状4個繋ぎ	緑色・黄色・赤色・藍色・紫色・白色・黒色（鎌倉芳太郎の記録による。配色は不明）	身高未計測 底径11.2	古写真 宜野湾御殿旧蔵	尚寅の光緒元（1875）年、宜野湾御殿創設時製作か。 製作時期が絞れるため基準資料と位置付けられる。
B	№9御玉貫		19世紀中期～後半	蓋側面：4個繋ぎ 胴：4個繋ぎ 高台：4個繋ぎ	地色：緑色 緑色・紫色・黄色・赤色・黒色・白色	身高28.4 口径5.9～6 胴径9.5～7 底径12.0	現存	個人蔵 九州国立博物館寄託

凡例　表1：現存する御玉貫からみた製作年代の変遷（暫定）及び表2：古写真・絵図にみえる御玉貫等の図案で行った考察を元に御玉貫・御玉垂の製作推定年代順に一覧にまとめてみた。

・現存資料の推定製作年代について ➡ で示した。参考事例とした琉球関係のガラス玉製品は ➡ で示した。古写真に画像が残る資料は配色等が不明であるが、ガラス玉の編み方や鎌倉芳太郎の記録等で考察が可能な資料だけ製作年代を推定し ➡ で示した。

・№11錫製酒瓶御玉貫は、鎌倉芳太郎撮影の古写真であり、ガラス玉の配色等の検討が困難である。左右の蓋の図案構成は相違しており、元は別の組み合わせだったと思われる。また身とも本来の組み合わせでないことから、製作年代の考察が難しいため本表では、比較検討の対象から外している。

④近世期に琉球国へ導入された工芸品の製作技術

・『琉球国由来記』・『球陽』・『家譜』等にみえる工芸製作技術の伝播に関する事項のデータベース化

・52 項目 79 事例。中国から導入を図られた事例が最も多く 33 事例（時期若しくは導入した人物等の具体的な記述がある事例は 22 事例）

・日本・薩摩から琉球へ導入された工芸技術が導入された事例は 16 事例。

・導入時期が正確に伝わっていない事例が 31 事例。多くは 17 世紀以前、古琉球期に伝播したもの。

・時期が明確な事例では 17 世紀が最も多く 27 事例、18 世紀が 20 事例、19 世紀が 1 事例。

・同じ工芸技術の取得に対して別人が何度も派遣→琉球に入った工芸技術が途絶えた・新たな技法の導入を目的とし何度も派遣。

・同じ人物が複数の工芸技術の導入に携わる。習得期間が短く、熟練した技術を得て帰国したか疑問が残る。

・工芸技術取得に取り組んで帰国した功績自体が評価されるため、習得期間が短期間であったり、一度の派遣で複数習得を試みた可能性。

・過去に取得した工芸技術に対して同一人物が再度派遣される事例無し。同じ技術取得の派遣は認められなかったのではないか。

・中国や日本・薩摩の人間が移住して工芸技術を導入した事例もあった。

『琉球国由来記』・『球陽』・『家譜』等にみえる工芸製作技術の伝播一覧

表1

No.	導入された工芸技術等	時期	内容	技術伝播の経路	携わった人物	出典
1	凉傘	尚巴志王世代（由来記） 康熙5（1666）年（球陽）	尚巴志王の世代に中国の制度が来て用いるとある（由来記）。 康熙5年、毛栄清が貢使となり閩で鄭思善とともに凉傘と五方旗を公銀四十両で作らせた。	中国福州→琉球	毛栄清（喜屋武親雲上盛勝） 鄭思善	由来記 巻三 財器門 球陽 尚質王一九年条
2	五方旗	康熙5（1666）年	康熙5年、毛栄清が貢使となり閩で鄭思善とともに凉傘と五方旗を公銀四十両で作らせた。五方旗炎上後、五色の芭蕉布の旗となったとある。	中国福州→琉球	毛栄清（喜屋武親雲上盛勝）	由来記 巻三 財器門 球陽 尚質王一九年条
3	匱	不明	中国の制に倣うとある。	中国→琉球	記述無し	由来記 巻三 財器門
4	漆器	不明	和漢の制器を用いるとある。	日本・中国→琉球	記述無し	由来記 巻三 財器門
5	貝摺師	崇禎9（1636）年	崇禎9年に国吉が閩に入りて三年滞在し、貝摺（螺鈿）と塗物（髹漆）を学ぶ。同14（1641）年に貝摺師となる。青貝師の始めなりとある。	中国福州→琉球	国吉（後に伊平屋比嘉を領す）。織の国吉と同一人物の可能性有り。	由来記 巻四 技術門 球陽 尚賢王元年条
6	漆器の法	康熙2（1663）年	陸得先が王府の命により、慶賀使に随いて閩に赴き、白糖・氷糖の製法とともに朱塗・黒赤梨地・金銀箔等の製造を伝授して帰国した。漆器並びに金銀箔の法は、貝摺勢頭に教授し、白糖の法は浦添群民に教授したとある。	中国福州→琉球	陸得先（武富親雲上重隣）	球陽 尚質王一六年条
7	煮貝技術	康熙29（1690）年	康熙29年大見武憑武が杭州で煮貝の技術を学ぶ。康熙34（1695）年に神谷親雲上に教える(由)。 家譜では揚州で煮貝の技術を学ぶとある（関姓家譜）	中国揚州（杭州）→琉球	関忠勇（大見武筑登之親雲上憑武）	由来記 巻四 技術門 新参関姓家譜正統
8	堆錦塗	康熙54（1715）年	首里の房弘徳は、自ら工夫し始めて異製の漆法で器物を飾る。これを堆錦塗と言い、国用に供し、褒奨を賜る。	琉球	首里の房弘徳（比嘉筑登之親雲上乗昌）	球陽 尚敬王三年条
9	朱塗・木地引	乾隆39（1774）年	薩摩より朱塗・木地引の匠を召したいとあり、貝摺師の査允泰・向允升・具文忠、木地引匠の西村新垣筑登之・若狭町村比嘉仁也・渡嘉敷仁也が派遣され三年滞在した（球附）。 薩摩に派遣も、細工所に工房の準備が無く、製作ができないと木地引並塗物師より要望があった（琉球館文書）	琉球→薩摩	査允泰（仲宗根筑登之親雲上真常 向允升（粟国筑登之朝●（木＋康）） 具文忠（金城筑登之唯福） 西村新垣筑登之・若狭町村比嘉仁也・同村渡嘉敷仁也	球陽附巻尚穆二三年条 琉球館文書
10	画工	不明	中古より唐に入り、或いは倭に入り、伝授すると雖も、人員の詳細は不明とある。	日本・中国→琉球	記述無し	由来記 巻四 技術門
11		順治17（1660）年	李基昌（崎山喜俊）、薩摩で絵師内藤等甫に絵を学ぶ。	薩摩→琉球	李氏東風平（後に崎山）筑登之喜俊	由来記 巻四 技術門 球陽附巻尚質王一三年条
12		康熙22(1683)年	康熙22年、璩（琥）自謙（石嶺傳莫）・査康信（上原眞知）が閩に入り、王調鼎・謝天游（祐）・孫億に学び、画絵の法を伝授して康熙26（1687）年に帰国する。	中国福州→琉球	璩（琥）自謙（牧志傳莫。後、石嶺傳莫） 査康信（上原眞知）	由来記 巻四 技術門 球陽附巻尚質王一三年条
13		康熙43（1703）年	康熙43年、琉球に伝授の絵師がいないため呉師虔が中国に派遣され、翌年福州第一の孫億、第二の順梁亨及び鄭大観を師として康熙46（1707）年まで学んだ。	中国福州→琉球	呉師虔（山口親雲上保房）	呉姓家譜
14		乾隆35（1770）年	乾隆35年、進貢使に随い北京まで登った。山體岸組の風景を見聞し稽古に励んだ。乾隆38（1773）年中城王子尚哲に随いて薩摩に入った。北京・薩摩で国用となる絵を描いたとある。	中国北京・福州・薩摩→琉球	呉著温（屋慶名筑登之親雲上政賀）	呉姓家譜

15	表具師	不明	伝授の人員の詳細は不明とある。	不明	記述無し	由来記巻四　技術門
16		順治年間	中城筑登之親雲上という表具師ありとある。	不明	中城筑登之親雲上（尚氏金武王子朝貞奉公人）	由来記巻四　技術門
17		康熙31(1692)年	康熙31年に宮城元易が北谷王子朝愛に随従して薩摩に赴き、朝愛の命により、熊谷有善坊・眞方善右衛門から表具の技術を伝授される。康熙34(1695)年より表具師主取となる。	薩摩→琉球	鄂氏宮城筑登之親雲上元易	由来記巻四　技術門
18	玉焼	康熙9(1670)年	康熙9年に與那城（平田）典通が閩で五色の玉焼の製作を稽古し、康熙11(1672)年に首里城の屋根に玉の龍頭・獅子頭を始めて製作する。また孔子並四賢之御像を製作する（由）。 與那城典通が貢使に随いて閩に入り京に赴き、瓷器及び焼玉を焼製する法を伝授して帰り、五色の珠玉を焼くとある（球）	中国→琉球	宿氏與那城（平田）筑登之典通	由来記 巻四　技術門 球陽　尚貞王二年条
19	瓦工	不明	焼き始めの年代は不明とある。	不明	記述無し	由来記 巻四　技術門
20		不明	昔、唐人が渡来し、真和志間切の国場村に居住し、真玉橋村で焼き始める。御検地帳には渡嘉敷三良と云う。	中国→琉球	渡嘉敷三良	由来記 巻四　技術門 球陽外巻一遺老説伝
21	陶工	萬暦44(1616)年	陶芸の始めは、萬暦44年、尚豊王が佐敷王子として薩摩に滞在時に高麗人の一官・一六・三官を召し列れて帰国し、特に一六は、琉球に住み付き仲地の姓を賜るとある（由）。 一六は張献功（姓は仲地、名乗は麗伸）とある（球附）	（朝鮮）→薩摩→琉球	一官・一六・三官（高麗人）。 一六（張献功・仲地麗伸）は琉球に帰化。	由来記 巻四　技術門 球陽附巻尚寧王二八年条
22		雍正9(1731)年	雍正8(1730)年麻世忠（真境名親雲上真本）に随いて薩摩に到り林氏・星山氏から立野焼物の法を伝授し、秋に帰る。雍正9年より陶窯を湧田に作り陶焼を行う。	薩摩→琉球	那覇泉崎村の仲村渠・賀数	球陽附巻尚敬王一九年条
23		乾隆53(1788)年	乾隆51(1786)年に薩摩の命を奉じて閩に到って陶業を学ぶ。粉朱をして五色を鍍する法を学習した。各色の詩箋を製造し、鴨鶏卵を蒸生し、陶器に装飾をする法を学ぶ。乾隆52(1787)年夏に薩摩に到り、学んだ陶業を試すに良好で、薩摩の人に伝授したとある。	中国福州→琉球→薩摩	仲元筑登之親雲上 新垣筑登之親雲上	球陽附巻尚穆王三七年条
24	木匠	不明	天孫氏より有り来るとある。	不明	記述無し	由来記 巻四　技術門
25	鍛冶	不明	天孫氏より有り来るとある。	不明	記述無し	由来記 巻四　技術門
26	石工	不明	天孫氏より有り来るとある。	不明	記述無し	由来記 巻四　技術門
27	畳刺	不明	何世代より始まるか不明。中華に通じて以後始まるかとある。	中国→琉球か	記述無し	由来記 巻四　技術門
28	簾細工	不明	何世代より始まるか不明。中華に通じて以後始まるかとある。	中国→琉球か	記述無し	由来記 巻四　技術門
29	皮細工	不明	何世代より始まるか不明。中華に通じて以後始まるかとある。	中国→琉球か	記述無し	由来記 巻四　技術門
30	組物細工	不明	何世代より始まるか不明。中華に通じて以後始まるかとある。	中国→琉球か	記述無し	由来記 巻四　技術門
31	貫物細工	不明	何世代より始まるか不明。中華に通じて以後始まるかとある。	中国→琉球か	記述無し	由来記 巻四　技術門
32	鼓張	不明	何世代より始まるか不明。中華に通じて以後始まるかとある。	中国→琉球か	記述無し	由来記 巻四　技術門
33	糸組	不明	何世代より始まるか不明。中華に通じて以後始まるかとある。	中国→琉球か	記述無し	由来記 巻四　技術門
34	玉貫	不明	真和志間切の銘苅村の女が唐人と夫婦になり、生まれた男子に玉貫の技術を教えたとある。技術が導入された年代は不明。	中国→琉球	唐人と銘苅村女の男子	由来記 巻四　技術門 球陽外巻一遺老説伝
35	鞍打	不明	琉球の鞍は和国の製作技法を見て作っている。牧志親雲上が鞍の製法を伝授して作った。その後、荒木拾左衛門製作の鞍を薩摩よりお手本として下し、これよりその製法が始まるとある。	薩摩→琉球	牧志親雲上小大良	由来記 巻四　技術門

36	彫物	不明	中華に通じて以後始まるかとある。	中国→琉球か		由来記 巻四　技術門
37		康熙年間	久米村牧湊親雲上が初めて彫物勢頭となるとある。	不明	牧湊親雲上（久米村系士族）	由来記 巻四　技術門
38	縫物細工	不明	その始めは不明であるとある。	不明	記述無し	由来記 巻四　技術門
39	染物師	不明	染物は前代は木皮染であったとある。	不明	記述無し	由来記 巻四　技術門
40		萬暦40（1612）年	萬暦40年に藍染が初めて導入され、薩摩の人、酒匂四郎右衛門が琉球に住み付き、国中に教える	薩摩→琉球	酒匂四郎右衛門景陳（剃髪して善濟）	由来記 巻四　技術門
41	紙漉	不明	往古から紙漉があったか伝来は不明。	不明	記述無し	由来記 巻四　技術門
42		康熙25（1686）年	康熙25年に大見武憑武が薩摩で杉原紙・百田紙の漉法を草野五右衛門を師として伝授し琉球にもたらした。康熙33（1694）年紙漉主取となる。これより琉球の紙漉きの始めであるとある（由）。 康熙34（1695）年金城邑大樋川辺に移住し造紙するとある（球附）	薩摩→琉球	関忠勇（大見武筑登之親雲上憑武）	由来記 巻四　技術門 球陽附巻尚貞王二七年条
43		康熙51（1712）年	那覇の翁能哲は、王府の命により久米島で人民をして桑樹・楮樹・宇祖古樹等を用いて楮紙を製造させる。	琉球	翁能哲（富村親雲上盛友）	球陽　尚益王三年条
44		康熙57（1718）年	欽兆鳳・房弘徳・査王蚕は康熙56（1717）年に芭蕉紙の製造に成功した。また翌康熙57年に王府より銀子200両を賜い、山川村に造紙所を設けた。造紙の技術を宮古・八重山・大島に伝えた。雍正甲辰の年（雍正2（1724）年）に房弘徳が色半紙・広紙を製造した。その丙午の年（雍正4（1726）年）には奉書紙・高檀紙・百田紙を製造した。その辛酉の年（己酉の誤りか。雍正7（1729）年）に藁紙を製造するとある。	琉球	欽兆鳳（祖慶筑登之親雲上清寄） 房弘徳（比嘉筑登之親雲上乗昌） 査王蚕（仲宗根筑登之親雲上真秀）	球陽　尚敬王六年条
45		乾隆47（1782）年	慶良間島渡嘉敷村の新垣仁也、乾隆41（1776）年に内之浦直庫弥右衛門に雇われ、水手となり本州に到る。以前、中華で製紙の法を学んだことにより、乾隆43（1778）年以来、薩摩で製紙を試し、紙を製造する。このため乾隆47年に王府は新垣を報奨した。乾隆51（1786）年、薩摩で御納戸与力となり新垣筑兵衛と改め琉球国の版図より除去され、翌年妻屋鉄兵衛等と琉球に入り、砂石・草木・鳥獣調査を行う。乾隆53（1788）年筑兵衛の男子を琉球から呼び寄せ仁右衛門とする。新垣家は代々御納戸御子人となるとある。	中国→琉球→薩摩	慶良間島新垣仁也 （後に薩摩で士分となり新垣筑兵衛と改め御納戸与力となる）	球陽附巻尚穆王三一年・三五年・三七年条
46		道光27（1847）年	百田紙の製法が断絶したので道光20（1840）年に金城村の百姓比嘉筑登之親雲上が製作を試み、王府は宝口で比嘉に製作させたが、失敗し、道光26（1846）年泉崎村の鄭氏金城筑登之順応が薩摩に赴き製紙を学習して帰国後、金城をして紙座で上紙・下紙・百田紙・美濃紙・宇田紙・杉原紙を試作する。杉原紙以外は善美だった。道光20年以降、国内に楮木を広く植栽し繁茂したため、王府は公用の紙に国製を使用するを許した。	薩摩→琉球	鄭氏金城筑登之順応	球陽附巻尚育王一三年条
47	唐紙・印金紙・緞子紙	乾隆31（1766）年	首里大中村の無譜の知念が始めて唐紙・印金紙・緞子紙を製造した。これより他国より購入しなくなったとある。	琉球	首里大中村の無譜知念筑登之親雲上	球陽　尚穆王一五年条

⑤近世期に琉球国で工芸品に使用された原材料に関する考察

・進貢貿易時に作成された免税摺に記載された色材を中心とした工芸品製作の原材料・貝摺奉行所文書に記載された原材料・首里城重修関連文書に記載された原材料の分析

・那覇市・沖縄県立博物館・美術館・浦添市・沖縄美ら島財団等、様々な機関が文化財の保存修理・復元模造製作事業等の目的のため科学調査を実施。データの公開（報告書・紀要等の刊行）も進んでいるが、各機関のデータを集約・分析した研究はこれまで無かった。

・絵画・絵図・書跡等の紙資料 31 件（表 4－1)、漆工品 115 件（非破壊調査 55 件（表 4－2－1)、資料採取調査 60 件（表 4－2－2))、歴史資料 2 件（表 4－3)、刀剣類 3 件（表 4－3)、金工資料 14 件（表 4－3)、ガラス製品 10 件（表 4－3)、玉製品 8 件（表 4－3)、染織資料 89 件（表 4－4)、陶芸資料 17 件（表 4－5）の合計 289 件を一覧とした。

・清朝との進貢貿易を行っていたことから、同時期の日本国内の工芸製作より輸入色材を多用している傾向が見られる。鉛白（塩基性炭酸鉛)・水銀朱（硫化水銀)・石黄（硫化砒素)・群青（炭酸水酸化銅)・緑青（塩基性炭酸銅)・呉須（石青。コバルト・鉄・マンガン・砒素等を成分とする鉱物)、プルシアンブルー（ベロ藍・洋青・フェロシアン化第二鉄カリ）等の鉱物顔料が絵画や美術工芸資料に多用されている点が挙げられる。

・1704 年にドイツで発明されたプルシアンブルーが乾隆 42（1777）年を始めとして琉球に輸入されていることが免税摺から確認。科学調査で絵画・染織作品に多く確認。日本国内（主に長崎）と別系統のプルシアンブルー輸入の流通ルートがあったといえる。

・臙脂のような昆虫由来の色材も多く輸入されている。分析結果では東南アジア産のラックカイガラムシだけでなく、中南米産のコチニールカイガラムシも確認されている。染織品を中心とした工芸品の色材だけでなく、食紅としても使用。

・藍・鬱金は、琉球国内で栽培しているため輸入品目には出てこない。染織を中心に確認事例は多い。また赤色系中間色・紫色・緑色等の混色表現で使用事例が多くみられる。

・祭祀儀礼道具には輸入色材を大量に使用して道具製作を行っている。

・課題として混色表現（赤色系中間色・紫色・緑色）の色材組合せの分析→将来的に編年的考察が遅れている染織作品等の年代分析に活用できないか。→色材組合せの分析は実施中。

・課題→色材のような物品だけでなく、文化の流入も琉球ルートよりもっとあったのではないか。事例として絵画の描写表現。南宋画の移入は長崎だけでなく、琉球ルートもあったと思われる（ただし日本国内への伝播ルートとしては限定的だったと思われる)。

表1

檔案史料にみえる中国から琉球に輸入された工芸品製作材料及び工芸品一覧

	毛辺紙	連史紙	大油紙 小油紙	甲紙	粗紙	川連紙	色紙	紅紙	紙画類	墨類	漆木 箱類	漆匣盤類	彫漆 大圍 屏	生漆 漆	銀朱 辰砂 硃砂	臙脂類	石黄 雄黄	紅花	黄蝋	蘇木	明礬 白礬	黄丹	洋青	石青	硼砂	水銀	藤黄 (藤黄か)	搭載した船の種別
乾隆32年(1767)	33,120	7,720	3,000	19,040		266	3,600		12	195	88	1,150		250	7,110	3,000	20		1,070	500	1,010					3,100		進貢船
乾隆39年(1774)	115,200			32,623				2,000		500		2,800		180	1,410	28,500	1,550			3,000	200	350		40		300		進貢船
乾隆40年(1775)	48,610		1,800	23,460				3,000	20	370		3,140	2	50	710	30,000	540			6,300	100	100		100				接貢船
乾隆41年(1776)	210,060		2,100	43,516				200	29	860		2,500		380	7,580	72,000		850		16,000		120		1,400				進貢船
乾隆42年(1777)	84,000		1,800		16,355			700	20	340		3,475		80	1,470	3,000				4,800			150					接貢船
乾隆43年(1778)	209,400		2,990	43,216					26	362	348	6,000		220	16,347	3,000				7,417	11,510					1,380		進貢船
嘉慶8年(1803)	20,000			11,400						10					100					900			200				100	接貢船
嘉慶26年(1821)	118,000		1,800	28,400						65	98	3,660			40,000	40,000				10,000								進貢船
道光2年(1822)	42,000		500			4,560				80	34	10,200			800					10,000								護送船
道光4年(1824)	76,200		5,900	20,825							170	7,220				20,000				36,000						11,000		接貢船・難船
道光5年(1825)	73,600		2,950	25,000						45	17	230			42,000	70,000				40,000						4,000		進貢船・難船
道光6年(1826)	75,400		5,620	18,600						80	161	7,500			11,200	30,000				32,000								接貢船・護送船
道光10年(1830)	55,400		2,680	5,600						35	76	3,040								30,000			1,000			2,000		接貢船・難船
道光11年(1831)	72,000		2,700	30,350						40		3,260			10,000	30,000				74,500								進貢船・難船
道光12年(1832)	76,100		3,950	26,850						45		5,115			19,100	30,000				37,620						7,000		接貢船・難船
道光16年(1836)	41,000		2,400	16,300						40		2,500				16,000				25,000						4,000		接貢船・難船
道光17年(1837)	116,800			26,500						80		6,010																進貢船・護送船
道光18年(1838)	53,000		3,300	13,000						50		2,238																接貢船
道光19年(1839)	151,500		3,300	25,450						50		4,600			3,000	30,000				6,000						4,000		進貢船・難船
道光20年(1840)	81,800		5,000	13,350						170		6,300																接貢船・迎接謝恩船・難船
道光22年(1842)	57,600		2,500	16,900								3,410			8,000	32,500										9,000		接貢船・難船
道光23年(1843)	78,000		2,600	23,400								4,325			40,000	50,000										3,000		進貢船・難船
道光24年(1844)	59,000		700	8,890								3,488			14,000													接貢船
道光29年(1849)	78,000		1,400	17,400								5,250			3,000	70,000										2,400		進貢船
道光30年(1850)	56,500		1,100	6,000								3,000			3,000	90,000									4,000	1,500		接貢船・難船
咸豊3年(1853)	128,000		2,000	11,000								7,000			2,000										600	800		進貢船
咸豊4年(1854)	101,000		1,200	14,100								6,062			1,500	10,000		18,600								1,000		接貢船・護送船・難船
咸豊5年(1855)	164,000		2,000	17,707								6,025			5,000	40,000									4,000	10,000		進貢船・難船
咸豊6年(1856)	61,000			8,900								3,400			1,100	30,000												接貢船・難船
咸豊8年(1858)	72,000		2,000	7,500								1,500			2,000	10,000									1,000	1,000		接貢船
咸豊10年(1860)	84,000		2,000	9,000								2,125			500	30,000									2,000	500		接貢船・難船
光緒元年(1875)	108,000		10,000	24,000						100		3,000			1,000	20,000												進貢船
量詞	張	張	張	斤	斤	斤	張	張	張	斤	個及び隻	個	架	斤	斤	張	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤		

※船の種別で護送船は琉球周辺で漂流した中国人等を送還するための船。
　難船は中国沿岸で遭難した琉球船である。
　清代中琉関係档案撰編に収録された琉球国船帰国等に関する免税摺の清単から作成した。
　清単に記載されている量詞を採用した。

表3

正殿重修（道光25～26年）時に調達指示のあった原材料等一覧

道光25（1845）年2月

No.	表記名称	原材料の材質	使用用途	推定産地	数量	量詞	備考
1	唐朱	赤色系鉱物顔料。中国製の辰砂（水銀朱）	赤色彩色部分の色材	中国	10.105	斤	
2	丹朱	赤色系鉱物顔料。辰砂（水銀朱）	赤色彩色部分の色材	不明。中国	5.05		
3	正延紫	赤色系有機顔料。腥臙脂（昆虫由来）	用途不明。赤色彩色部分の色材か	中国	71	枚	
4	金薄	金箔	箔絵	不明。日本・中国か	56324	枚	
5	水粉	白色系顔料。材質不明。錫・鉛・胡粉等の可能性があり、おそらく胡粉と思われる。	白色彩色部分の色材	不明	8.344	斤	胡粉であれば琉球で加工は可能。
6	明ばん	明礬	膠と混ぜ絵具の滲み止めに使用	中国	138.5	匁	
7	吉野紙		漆を漉すために使用	日本	3	束	1束＝200枚。
8	石黄	黄色系鉱物顔料（硫化砒素）	黄色彩色部分の色材	中国	4.243	斤	
9	砂緑	不明。緑青の一種か。	緑色彩色部分の色材	不明	2.572	斤	
10	砂紺青	青色系人工顔料（鉄系化合物）。プルシアンブルー（ベロ藍）	青色彩色部分の色材	中国	130	め	
11	石緑	緑青。緑色系鉱物顔料（銅系化合物）	緑色彩色部分の色材	中国	270	め	
12	藍浪	青色系有機顔料	青色彩色部分の色材	琉球	7.141	斤	
13	土黄	藤黄。オトギリソウ科フクギ属の染料を顔	黄色彩色部分の色材	不明	130	め	
14	地漆	琉球産漆か。	塗料（下塗）として使用	琉球産か	12.286	斤	
15	吉野漆	日本製漆	塗料（下塗）として使用	日本	3	斤	
16	小文筆		図案製作の画材	不明	5	対	
17	達磨墨	黒色系顔料。墨	図案製作の画材	日本	3	対	
18	大彩筆		図案製作の画材	不明	3	対	
19	中彩筆		図案製作の画材	不明	3	対	
20	小彩筆		図案製作の画材	不明	3	対	
21	絵書筆		図案製作の画材	不明	4	対	
22	銀箔	銀箔	使用用途不明	日本か	80	枚	
23	荏子油	乾性油	塗料として使用。顔料の溶媒若しくは塗膜のコーティング材として使用か。	不明	4	斤	

道光25年3月

No.	表記名称	原材料の材質	使用用途	推定産地	数量	量詞	備考
1	久米赤土	赤色系鉱物顔料（酸化第二鉄系）	赤色系鉱物顔料（酸化第二鉄系）。 久米島在番へ来年2月までに久米赤土の調達指示。 同年7月、久米島在番より久米赤土３斗６升納品の報告。3月に調達指示の３斗２升分か。	琉球	3.2	升	実際は３斗６升調達か。

2	久米赤土	赤色系鉱物顔料(酸化第二鉄系)	赤色系鉱物顔料(酸化第二鉄系)。 久米島在番へ早船にて久米赤土の調達指示。調達が実現したか不明。	琉球	1.5	石	

道光25年3月20日

No.	表記名称	原材料の材質	使用用途	推定産地	数量	量詞	備考
1	弁柄朱	赤色系鉱物顔料(酸化第二鉄系)	久志間切で弁柄朱の生産指示。調達が実現したか不明。 道光26年1月、弁柄朱60斤の調達指示あり。産地に関する記載無し。久志間切弁柄による調達か不明。	琉球	33	斤	

道光25年８月

No.	表記名称	原材料の材質	使用用途	推定産地	数量	量詞	備考
1	赤筋糸	絹	瓔珞上部の刺繍糸 道光25年秋派遣の接貢船で中国での調達指示。調達が実現したか不明。以下、同	中国	56	匁	
2	黄筋糸	絹	瓔珞上部の刺繍糸	中国	56	匁	
3	青筋糸	絹	瓔珞上部の刺繍糸	中国	56	匁	
4	白筋糸	絹	瓔珞上部の刺繍糸	中国	56	匁	
5	黒筋糸	絹	瓔珞上部の刺繍糸	中国	56	匁	
6	赤筋糸	絹	瓔珞上部の刺繍糸	中国	87	匁	
7	紅あら筋糸	絹	瓔珞上部の刺繍糸	中国	360	め	
8	三味線男糸	絹	瓔珞のガラス玉・宝玉類装飾用か。	中国	15	匁	
9	赤地大花緞子	絹	刺繍の支持体	中国	1	本	本は反か。

道光26(1846)年1月

No.	表記名称	原材料の材質	使用用途	推定産地	数量	量詞	備考
1	なべ灰墨	黒色系顔料。灰墨。油煙類	下地の黒漆の原材料	琉球	2	石	
2	明松灰墨	黒色系顔料。灰墨。油煙類	下地の黒漆の原材料	琉球	50	済	済は升
3	渋	芭蕉渋か。	下地として使用	琉球	1	斗	
4	弁柄朱	赤色系鉱物顔料(酸化第二鉄系)	産地不明。日本産・琉球産双方可能性有。	不明	60	斤	

・『百浦添御殿御普請日記』から工芸品類で使用が想定される原材料等について抜き出し一覧とした。
・史料に記載されている量詞を採用した。

琉球関係文化財の材質分析推定結果一覧(絵画・絵図・書跡)

No.	資料名	含有する材質	所蔵等	出典・調査者	備考
1	琉球国惣絵図(間切集成図)	濃赤色:鉛(鉛丹)・水銀(辰砂)。濃赤色:鉛(鉛丹)・ラック(臙脂)。桃色:鉛(鉛白)・ラック(臙脂)。濃青色:銅(群青)。緑色:銅(緑青)。紫色:ラック(臙脂)・鉄(ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ)。紫色:ラック(臙脂)・藍。薄青色:鉄(ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ)	沖縄県立博物館・美術館	吉備国際大学紀要No.12 吉備国際大学:下山進等	資料の材質調査
2	爬龍船競漕及び帰唐船の図	赤色:水銀(辰砂)。青色:藍・鉄(ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ)。白:カルシウム(胡粉)。緑色:銅(緑青)	沖縄美ら島財団	琉球王朝の華 吉備国際大学:下山進等	保存修理時に蛍光X線調査を実施。
3	御絵図2-2	赤色:水銀(辰砂)。黄色:黄色染料・鉛。薄緑色:緑色染料か。緑色:銅(緑青)。全ﾎﾟｲﾝﾄで鉛検出。	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
4	御絵図4-2	赤色:水銀(辰砂)。黄色:黄色染料・鉛。茶色:鉛(鉛白)・水銀(辰砂)・銅(緑青)。緑色:銅(緑青)。全ﾎﾟｲﾝﾄで鉛検出。	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
5	御絵図11-2	赤色:水銀(辰砂)。黄色:黄色染料・鉛。緑色:銅(緑青)。灰色:鉛(鉛白)。全ﾎﾟｲﾝﾄで鉛検出	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
6	御絵図14-1	赤色:水銀(辰砂)。黄色:黄色染料・鉛。緑色:銅(緑青)。青色:銅(群青)。全ﾎﾟｲﾝﾄで鉛検出	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
7	御絵図22	赤色:水銀(辰砂)。黄色:黄色染料・鉛。青色:銅(群青)	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
8	御絵図22-2	白色:鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。黄色:黄色染料・鉛。茶色:水銀。緑色:銅(緑青)。全ﾎﾟｲﾝﾄで水銀検出	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
9	御絵図30-1	白色:鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。黄色:黄色染料・鉛。茶色:水銀。緑色:銅(緑青)。全ﾎﾟｲﾝﾄで水銀検出	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
10	御絵図36	赤色:水銀(辰砂)。黄色:黄色染料・鉛(鉛白)。緑色:銅(緑青)。黒色:炭素(墨)。全ﾎﾟｲﾝﾄで鉛検出。	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
11	御絵図帳	茶色(柿色):水銀(辰砂)。灰色(鼠色):鉛(鉛白)・水銀(辰砂)	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
12	御絵図帳	白色:鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。緑色:銅(緑青)。青色:銅(群青)。橙色:水銀(辰砂)・砒素(石黄)。紫色:水銀(辰砂)・銅(群青)。	那覇市歴史博物館	那覇歴博年報1号 吉備国際大学:下山進等	資料の材質調査
13	琉球国之図 (薩摩藩調製琉球図)	白色:鉛(鉛白)。薄赤色(桃色):赤色染料・鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。黄色:黄色染料・鉛。濃黄:鉄(黄土)。緑色:銅(緑青)。薄青:青色染料。青色:銅(群青)。紫色:鉛・鉄(鉛・鉄ともに少量検出。染料使用の有無を含めて色材特定は困難)。灰色:炭素(墨)。黒色:炭素(墨)。金色:金。	沖縄県立図書館	首里城研究No.12 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
14	孔子像及び四聖配像	白色:鉛(鉛白)。薄赤色:染料・鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)・赤色:赤色染料。薄橙色(顔):鉛(鉛白)・染料。臙脂色:染料・鉛(鉛白)。黄色:黄色染料・鉛。緑色:銅・砒素(花緑青か)。緑色:銅(緑青)。薄青:青色染料か。青色:銅(群青)。紫色:染料。灰色:炭素(墨)。黒色:炭素(墨)。金色:金。全ﾎﾟｲﾝﾄでカルシウム検出	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 琉球絵図報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
15	在番と親あんま	白色:鉛(鉛白)。薄赤色:赤色染料・鉛。赤色:水銀(辰砂)。黄色:黄色染料。緑色:銅(緑青)。薄青色:青色染料。青色:銅(群青)。紫色:鉛(鉛白)・染料。黒色:炭素(墨)。金色:金。全ﾎﾟｲﾝﾄでカルシウム検出。	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 琉球絵図報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
16	程順則朝服図	白色:鉛(鉛白)。薄赤色:赤色染料・鉛(鉛白)。薄橙色(顔):鉛(鉛白)・染料。薄橙色(襟):鉛(鉛白)・染料。緑色:銅(緑青)。水色:銅(群青)。青色:銅(群青)・鉄・ｺﾊﾞﾙﾄ。紫色:鉛(鉛白)・染料。黒色:炭素(墨)。金色:金。全ﾎﾟｲﾝﾄで鉛検出。	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 琉球絵図報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
17	花鳥図(孫師昌)	白色:鉛(鉛白)。薄赤色:赤色染料・鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。橙色:染料・鉛(鉛白)。黄色:染料・鉛(鉛白)。薄茶色:銅(緑青)・染料か。緑色:銅(緑青)。青色:銅(群青)。黒色:炭素(墨)。金色:金。	沖縄美ら島財団	首里城研究No.12 琉球絵図報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査 孫師昌は中国人絵師
18	花鳥図(孫億)	白色:カルシウム(胡粉)。薄赤色:染料・カルシウム。赤色:水銀(辰砂)。緑色:緑色染料。緑色:銅・砒素(花緑青か)。薄青色:青色染料・カルシウム(胡粉)。青色:銅(群青)。青色:鉄(少量。鉄が色材由来か不明)。	沖縄美ら島財団	首里城研究No.12 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査 孫億は中国人絵師。本資料は孫億の模写の可能性有り。 日本人絵師製作か。
19	雪中雉子之図	白色:鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。橙色:鉛(鉛丹)。茶:鉄(代赭)。薄緑色:緑色染料。緑色:銅(緑青)。青色:銅(群青)。灰色:炭素(墨)。黒色:炭素(墨)。全ﾎﾟｲﾝﾄでカルシウム検出。	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 琉球絵図報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
20	花鳥図(殷元良)	白色:鉛(鉛白)。薄赤色:赤色染料・鉛(鉛白)。黄色:黄色染料・鉛(鉛白)。薄緑色:緑色染料。緑色:銅(緑青)。薄青色:青色染料。全ﾎﾟｲﾝﾄでカルシウム検出。	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 琉球絵図報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
21	魏学源肖像図	白色:鉛(鉛白)。薄赤色:赤色染料・鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。薄橙色(顔):鉛(鉛白)・赤色染料。黄色:黄色染料。茶色:鉛(鉛白)・鉄(代赭)。緑色:銅(緑青)。青色:鉛(鉛白)・青色染料。薄青色:青色染料。青色:鉄(ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ)・水銀(辰砂)・砒素(石黄)。赤紫色:染料。薄青紫色:鉛(鉛白)・紫色染料。灰色:炭素(墨)。黒色:炭素(墨)。ほとんどのﾎﾟｲﾝﾄでカルシウム検出。	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 琉球絵図報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査 作者不明。中国人絵師と思われる。
22	花鳥図(毛長禧)	白色:鉛(鉛白)。薄赤色:赤色染料・鉛(鉛白)。薄橙色:水銀(辰砂)。黄色:染料・鉛(鉛白)。赤茶色:鉄(代赭)。薄緑色:染料。緑色:銅(緑青)。緑色:緑色染料。薄青黒色:青色染料・墨。薄青黒色:青色染料・墨・鉛(鉛白)。灰色:炭素(墨)。黒色:炭素(墨)。全ﾎﾟｲﾝﾄでカルシウム検出。	沖縄県立博物館・美術館	首里城研究No.12 琉球絵図報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
23	琉球美人	白色:鉛(鉛白)。薄赤色:赤色染料・鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。橙色:赤色染料・鉛(鉛白)。濃黄色:鉄(黄土か)。緑色:銅(緑青)。薄青色:青色染料。青色:銅(群青)。灰色:炭素(墨)。黒色:炭素(墨)。金色:金。銀色:銀。金色地(本紙周囲):銅・亜鉛(真鍮箔)。全ﾎﾟｲﾝﾄでカルシウム検出。	沖縄美ら島財団	首里城研究No.12 琉球絵図報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
24	白澤之図	白色:鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。薄橙色(顔):鉛(鉛白)・水銀(辰砂)。茶色:鉛(鉛白)・水銀(辰砂)。灰色:炭素(墨)。黒色:炭素(墨)。全ﾎﾟｲﾝﾄでカルシウム検出。	沖縄美ら島財団	首里城研究No.12 琉球絵図報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
25	関羽像	白色:鉛(鉛白)。薄赤色:染料。赤色:水銀(辰砂)。赤色:赤色染料。茶色:鉄(代赭若しくは黄土)。薄橙色(顔):鉛(鉛白)・染料。緑色:銅(緑青)。青色:銅(群青)。紫色:鉛(鉛白)・染料。全ﾎﾟｲﾝﾄでカルシウム検出。	沖縄美ら島財団	首里城研究No.12 琉球絵図報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
26	神猫図(呉師虔)	赤色:水銀(辰砂)。黄色:砒素(石黄)。青色:藍。全ﾎﾟｲﾝﾄでカルシウム検出。	那覇市歴史博物館	那覇市の文化財 「神猫図」非破壊分析調査(非公開)	資料の材質調査
27	花鳥図(孫億)三幅	白色:鉛(鉛白)。赤色:鉛(鉛丹)。赤色:水銀(辰砂)。臙脂色:臙脂。臙脂色:臙脂・藍。茶色:鉄か(代赭か)・銅(緑青)・藍・墨。緑色:銅(緑青)・墨。緑色:藤黄・藍。青色:銅(群青)。黒色:墨。金色:金。	沖縄美ら島財団	首里年報No.10 京都工芸繊維大学:佐々木良子等	孫億は中国人絵師 保存修理時の材質調査
28	神猫図(武永寧)	白色:鉛(鉛白)。黄色:藤黄・鉛(鉛白)。緑色:銅(緑青)。緑色:藍・藤黄。紫色:鉛(鉛白)・藍・臙脂。黒色:墨。	沖縄美ら島財団	首里年報No.11 京都工芸繊維大学:佐々木良子等	保存修理時の材質調査
29	馬執宏書	赤色:臙脂(コチニールをアルミニウム(明礬)でレーキ顔料化していると推定)。	沖縄美ら島財団	首里年報No.4 京都工芸繊維大学:佐々木良子等	保存修理時の材質調査 修理時に試料抽出のうえ。調査実施。
30	梁必遠詩唱和詩	赤色:臙脂(ラックをアルミニウム(明礬)でレーキ顔料化していると推定。またラックはコチニールの可能性も有)・鉛(鉛白)・鉄由来の黄色系顔料(黄土か)	沖縄美ら島財団	首里年報No.5 京都工芸繊維大学:佐々木良子等	保存修理時の材質調査。
31	花鳥図巻	白色:鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。赤色:鉛白・赤色染料。橙色:鉛白・鉄か(代赭か)。黄色:鉛白・黄色染料。茶色:鉄か(代赭か)。緑色:銅(緑青)。青色:銅・亜鉛・砒素(群青)。青色:鉛白・青色染料。濃青色:銅(群青)と墨か。黒色:墨か。全ﾎﾟｲﾝﾄでカルシウム検出。	九州国立博物館	系譜・再興事業報告書 第2巻 早川泰弘	復元模造製作に伴う調査

凡例(含有する材質の項目)

・顔料は、目視で確認できる色:調査で得られた元素(顔料等の名称)とした。 例示　黄色:砒素(石黄)。
・緑色・橙色等の二色以上の色材を混ぜないと出せない色の記載の例示　緑色:鉄(ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ)・砒素(石黄)。
・植物染料は、調査結果と通常の染料の名称が一致することが多いので、統一して表記した。 例示　青色:藍　緑色:藍・砒素(石黄)。
・出典で略して記載した参考文献は別途正式な刊行物の名称を記載しておく。
・調査者は研究代表者若しくは、調査分析作業において主たる調査者を記載した。参加した個々の研究者は個々の参考文献を参照してもらいたい。
・本一覧表は、2022年3月現在で公開されている報告を取りまとめたものである。今後、各機関で資料調査の事例が増え、その調査結果が公開されれば、さらに詳細な前代の色材調達の傾向をとらえることができると思われる。

琉球関係文化財の材質分析推定結果一覧(漆工)

No.	資料名	含有する材質	所蔵等	出典・調査者	備考
1	長持	金色(箔絵):金・砒素(石黄)	徳川美術館	楽器報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
2	夜雨琴	白色:鉛(鉛白。右上白地部分)。緑色:銅(緑青)・鉛。	徳川美術館	楽器報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
3	二絃	金色(箔絵):金・砒素(石黄。胴腹部)	徳川美術館	楽器報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
4	胡琴	緑色:銅(緑青。胴部)。胴部金属円:銅・鉛。	徳川美術館	楽器報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
5	長線	胴上部　花　黄色:砒素(石黄)・水銀(辰砂)。胴上部　花　朱色:砒素(石黄)・水銀(辰砂)。胴上部　葉　緑色:砒素(石黄)。胴上部　長葉　薄緑色:砒素(石黄)。胴中央部分　蕾　朱色:水銀(辰砂)。胴中央部分　葉　緑色:砒素(石黄)。胴中央部分　鳥の首　暗金色:砒素(石黄)・金・水銀(辰砂)。胴中央部分　鳥の腹　明金色:砒素(石黄)・金・水銀(辰砂)。胴側面部分　花　金色:砒素(石黄)・金・水銀(辰砂)。	徳川美術館	楽器報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	復元模造製作に伴う調査
6	朱漆楼閣山水人物箔絵八稜盆	白色:鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。緑色:砒素(石黄)・有機系紺色顔料(藍か)。漆下地:鉄・カルシウム。	浦添市美術館	よのつじ№1 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
7	潤塗花鳥密陀絵盆	白色:鉛(鉛白)。赤色:鉄(弁柄)。緑色:銅(緑青)・砒素(石黄)。茶色:鉄(弁柄)・砒素(石黄)。漆下地:鉄・カルシウム。	浦添市美術館	よのつじ№1 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
8	朱漆山水人物箔絵八稜盆	白色:鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。緑色:砒素(石黄)・有機系紺色顔料(藍か)。漆下地:鉄・カルシウム。	浦添市美術館	よのつじ№1 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
9	白密陀山水人物四方盆	白色:鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。緑色:銅(緑青)。薄緑色:有機系緑色顔料か。	浦添市美術館	よのつじ№1 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
10	朱漆芙蓉密陀絵八角盆	白色:鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。濃赤色:鉄(弁柄)。緑色:砒素(石黄)・有機系紺色顔料(藍か)。薄青色:鉛(鉛白)・有機系紺色顔料。黒色:墨か。全てのポイントで鉛検出。	浦添市美術館	よのつじ№1 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
11	潤塗花鳥箔絵密陀絵丸形食籠	白色:鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。緑色・深緑色:砒素(石黄)・有機系紺色顔料(藍か)・鉛(鉛白)。黄色:砒素(石黄)。金色:金。	浦添市美術館	よのつじ№1 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
12	黒漆梅牡丹七宝繋箔絵沈金三足	金色:金・砒素(石黄。箔下漆)。漆下地:カルシウム・鉄。	浦添市美術館	よのつじ№1 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
13	黒漆花鳥箔絵密陀絵盆	白色:鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。緑色:砒素(石黄)・有機系紺色顔料(藍か)。茶色:鉄(弁柄)・砒素(石黄)。漆下地:カルシウム・鉄。ほとんどの文様部分から鉛検出。	浦添市美術館	よのつじ№1 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
14	潤塗花鳥箔絵密陀絵食籠	白色:鉛(鉛白)。赤色:水銀(辰砂)。黄色:砒素(石黄)。金色:金。	浦添市美術館	よのつじ№1 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
15	黒漆花鳥漆絵箔絵櫃	赤色:水銀(辰砂)。金色:金・砒素(石黄。箔下漆)。漆下地:カルシウム・鉄。金具類:銅・亜鉛(真鍮)。	浦添市美術館	よのつじ№1 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
16	朱漆鳳凰丸文箔絵櫃	赤色:水銀(辰砂)。金色:金・砒素(石黄。箔下漆)。漆下地:カルシウム・鉄。金具類:銅・亜鉛(真鍮)。	浦添市美術館	よのつじ№1 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
17	朱漆花鳥螺鈿卓	赤色:水銀(辰砂)・カルシウム。	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
18	黒漆山水楼閣螺鈿角切盆	雲輪郭線:鉛・銀・鉄・カルシウム・錫。切金:金・銀・銅(金92%:銀6%:銅2%)	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
19	黒漆唐草螺鈿提重(瓶塗装部分)	瓶身側面:砒素(石黄)。瓶蓋:水銀(辰砂)	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査 日本製作の可能性有
20	朱漆湯庫	赤色:水銀(辰砂)。飾金具:銅・亜鉛(銅73%:亜鉛27%)。内臓の湯注身部分:鉛・錫(鉛56%:錫44%)。湯注取手部分:銅・亜鉛(真鍮合金。銅79%:亜鉛21%程度)	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
21	緑漆亀形酒器	緑色:砒素(石黄)。赤色:水銀(辰砂)。暗赤色:鉄(弁柄)	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
22	朱漆花鳥漆絵密陀絵壺	赤色:水銀(辰砂)。黄色:砒素(石黄)。白色:鉛。灰緑色:鉛。密陀絵なので全体的に鉛が検出される。	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
23	白密陀菊蝶箔絵盆	白色:鉛(鉛白。及び密陀絵塗料。乾燥剤等)。金色:金。鍔上縁部:鉛(鉛白)・鉄(弁柄)・金。鍔外側緑色部分:砒素(石黄)	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
24	白密陀花鳥箔絵盆	白色:鉛(鉛白及び密陀絵塗料・乾燥剤等)。椿部分赤色:水銀(辰砂)・鉛(乾燥剤等)。鍔外側赤色:水銀(辰砂)・金	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
25	黒漆銀梨子地牡丹蝶箔絵漆絵密陀絵盆	赤色:水銀(辰砂)。鉛(鉛白及び密陀絵塗料・乾燥剤等)。緑色:銅(緑青)。黄色:砒素(石黄)。	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
26	黒漆花鳥漆絵膳	緑色:砒素(石黄)・水銀(辰砂)※下地が反応か。カルシウム。赤色:水銀(辰砂)。黄色:砒素(石黄)。金色:金。	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
27	黒漆花鳥密陀絵漆絵盆	白色:鉛(鉛白若しくは乾燥剤)。黄色:鉛(鉛白若しくは乾燥剤)・銅。黄色(花びら):鉛(鉛白若しくは乾燥剤)・水銀(辰砂)。橙色(蕾):鉛(鉛白若しくは乾燥剤)。緑色:鉛(鉛白若しくは乾燥剤)・砒素(石黄)。薄緑色・暗緑色:鉛(鉛白か乾燥剤)・銅(緑青)。赤色:鉛(鉛白若しくは乾燥剤)・水銀(辰砂)。茶色:鉛(鉛白若しくは乾燥剤)。青緑色:鉛(鉛白若しくは乾燥剤)・砒素(石黄)。茶色:鉛(鉛白若しくは乾燥剤)。	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
28	黒漆花鳥密陀絵網代食籠	白色:鉛(鉛白)。緑色・青緑色:鉛(鉛白又は乾燥剤)。黄緑・濃緑:鉛(鉛白又は乾燥剤)・銅(緑青)。赤色:鉛(鉛白又は乾燥剤)・水銀(辰砂)。暗赤色・赤色(羽根先)・赤茶色(岩輪郭線):鉛(鉛白又は乾燥剤)・銅(緑青か)・水銀(辰砂)。赤茶色(地色):鉄・マンガン・カリウム・鉛。赤色(蕾):鉛(鉛白又は乾燥剤)・水銀(辰砂)・マンガン。茶色:鉛(鉛白又は乾燥剤)・銅(緑青)。	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
29	黒漆花鳥漆絵網代提食籠	黒色(地色)・暗緑色:カルシウム・鉄・鉛。黄色:鉄(黄土)。赤色:水銀(辰砂)。黄色(花)・黄色(蕾):鉄・銅。金色(鳥の羽):銅・亜鉛。金色(蕾縁周辺):金	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
30	黒漆双龍双鯰漆絵箔絵稜花盆	黒色(地色):鉄。黄色・緑色・暗緑色:砒素(石黄)。暗赤色:砒素(石黄)・鉄(弁柄)。赤色:水銀(辰砂)	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
31	朱漆菊唐草存星提重	赤色・濃赤色・暗赤色・明赤色:水銀(辰砂)。暗赤色:水銀(辰砂)。緑色・薄緑色:水銀(辰砂)・砒素(石黄)。黄色・茶:水銀(辰砂)・砒素(石黄)。持ち手金具:銅(純銅)。徳利:錫・鉛(錫81%:鉛19%程度)	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
32	黒漆山水楼閣人物存星鼓箱	赤:水銀(辰砂)。緑色・濃緑色・茶色:水銀(辰砂)・砒素(石黄)。黄色:砒素(石黄)。金色:金・砒素(石黄)・水銀(辰砂)。岩肌茶:砒素(石黄)・水銀(辰砂)。赤色(花文様):砒素(石黄)・水銀(辰砂)。赤色(身の底):鉄(弁柄)	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査 讃岐製漆器。
33	黒漆牡丹七宝繋沈金丸櫃	黒色:鉄・鉛・カルシウム。身上縁部(黄色及び金色):鉛・砒素(石黄)・金。紐金具:鉄・銅・亜鉛	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
34	黒漆日輪鳳凰瑞雲点斜格子沈金丸櫃	黒色:鉄・カルシウム・鉛・金。金色:金・鉛。蓋部分(黒色及び黄色):砒素(石黄)	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査
35	黒漆葡萄栗鼠沈金八角食籠	黒色:鉄・カルシウム・鉛。金色:鉛・金	沖縄美ら島財団	高野報告書 東京文化財研究所:早川泰弘等	資料の材質調査

36	黒漆鳳凰文沈金網代八角鉢	暗緑色：銅（緑青）・鉛。赤色：水銀（辰砂）・鉛。白色粒：水銀（辰砂）・鉛。茶色：鉛	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査
37	朱漆巴紋鳳凰七宝繋沈金丸櫃	赤色：水銀（辰砂）。金色：水銀（辰砂）※地色。・金。合口部：鉄・カルシウム・カリウム	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査
38	朱漆牡丹七宝繋沈金椀・天目台	赤色：水銀（辰砂）。金色：水銀（辰砂）※地色・金	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査
39	朱漆山水楼閣人物沈金皿	赤色：水銀（辰砂）。金色：水銀（辰砂）※地色が反応か・金※沈金の刻線。	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査
40	朱漆山水楼閣人物箔絵漆皿	赤色：水銀（辰砂）。薄赤色：水銀(辰砂)・鉛。金色：金・水銀（辰砂）※地色・砒素（石黄。箔下漆）。明緑色・暗緑色：水銀（辰砂）・砒素（石黄）。薄黄色：水銀（辰砂）※地色・砒素（石黄）。暗緑色：水銀（辰砂）・砒素（石黄）。	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査 中国製漆器か
41	朱漆宝尽箔絵方盆	赤色：水銀（辰砂）。金色・黄色：水銀（辰砂）・砒素（石黄）・金。	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査
42	朱漆山水楼閣人物箔絵八角東道盆	赤色：水銀（辰砂）。黄色：砒素（石黄）・水銀（辰砂）。	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査
43	朱漆牡丹蝶箔絵文庫	赤色：水銀（辰砂）。金色（箔絵）：水銀(辰砂)※地色が反応か。砒素（石黄。箔下漆）。暗緑色・明緑色：砒素（石黄）・水銀（辰砂）。銀色：銀。砒素（石黄）・水銀（辰砂）・金。暗黄色・白黄色・赤黄色：水銀（辰砂）・砒素（石黄）。金色・青金色：金・銀・砒素（石黄）・水銀。	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査
44	黒漆草花描金網代八角提食籠	緑色：鉛・銅・亜鉛。黄色：鉛・亜鉛・銅。緑色：鉛・亜鉛・銅。金色：金。	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所 早川泰弘等	資料の材質調査
45	黒漆椿樹漆絵密陀絵料紙箱・硯箱	白色：鉛（鉛白及び密陀絵塗料・乾燥剤等）。緑色：砒素（石黄）。赤色：水銀（辰砂）。薄黄色：鉛（鉛白）。茶色・濃茶色：砒素（石黄）。黒色：鉛・銅・亜鉛。濃青色：鉛（乾燥剤）・銅（群青）。	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査
46	朱漆山水楼閣堆錦東道盆	赤色：水銀（辰砂）・鉛。赤茶色：水銀（辰砂）・砒素（石黄）。黄色：砒素（石黄）。薄緑色：砒素（石黄）。赤色：鉄（弁柄）。暗赤色：鉄（弁柄）・砒素（石黄）・水銀（辰砂）※地色が反応か。濃緑色：砒素（石黄）。下地白色：鉄・鉛・カルシウム。	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査
47	朱漆山水楼閣人物堆錦文庫	赤色：水銀(辰砂)。黄色：砒素（石黄）。赤色：砒素（石黄）。※下地の黄色部分に反応か。黄緑色：砒素（石黄）。緑色・暗緑色：砒素（黄色）。	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査
48	朱漆松鶴堆錦盆	赤色：水銀（辰砂）。	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査
49	白密陀楼閣人物箔絵漆絵木彫彩漆箱	黄色：砒素(石黄)・水銀（辰砂）。暗緑色：砒素（石黄）・赤色：水銀（辰砂）。白色：鉛（鉛白）。	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査 他地域産と思われる。
50	黒漆人物堆彩漆箱	赤色：水銀（辰砂）。砒素（石黄）。暗緑色：砒素（石黄）・水銀（辰砂）。黄色：砒素（石黄）。	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査 他地域産と思われる。
51	木彫彩絵銅鑼	暗青色：銅・亜鉛・鉄・クロム・バリウム。明青色：亜鉛・鉄・クロム・バリウム。白色：亜鉛・鉄・クロム・バリウム・カルシウム。茶色：銅・亜鉛・鉄・カルシウム。暗緑色：銅・亜鉛・鉄・カルシウム・バリウム・クロム・鉛。赤色：鉄・鉛・水銀。金色：カルシウム・銅・亜鉛・鉄。飾金具：銅・亜鉛（真鍮。銅66%：亜鉛34%）。吊金具：鉄。銅鑼：銅：錫。撥の端（茶色）：鉛・チタン・クロム。	沖縄美ら島財団	萬野報告書 東京文化財研究所：早川泰弘等	資料の材質調査 他地域産と思われる。後世修理で使用された材質が反応している可能性もある。
52	緑漆牡丹唐草石畳沈金膳	緑色：藍・砒素（石黄）。黒色：鉄（漆）。金色：金。赤：水銀（辰砂）	沖縄美ら島財団	百星年報No.3 吉備国際大学：下山進等	資料の材質調査
53	緑漆山水楼閣人物箔絵六角食籠	緑色：藍・砒素（石黄）・鉄（漆下地と推定）・金：箔粉の金と推定）。赤色：水銀（辰砂）。金箔：金。	沖縄美ら島財団	百星年報No.5 吉備国際大学：下山進等	資料の材質調査
54	黒漆花鳥密陀絵箔絵食籠	赤色：水銀（辰砂）。白色：鉛（鉛白）。緑色・淡緑色：砒素（石黄）・藍。灰青色：銅（緑青）。灰青色：銅・墨（緑青・墨）灰緑色：銅（緑青）。金色：金。黒茶色（地色）：鉄（弁柄。地色は漆と弁柄による混塗）・鉛（密陀絵由来若しくは後補による密陀油塗布の可能性も有）。多くのポイントで鉛検出（色材だけでなく密陀絵加飾の密陀僧（一酸化鉛）のためか。）多くのポイントで金検出（地色に蒔かれた箔粉蒔が影響か）。	沖縄美ら島財団	百星年報No.7 東京文化財研究所：早川泰弘等（鉱物顔料） 吉備国際大学：下山進等（鉱物顔料・有機染料）	保存修理及び復元模造手板製作時に調査
55	聖観音像	青色：鉄（プルシアンブルー）	蓮華院	集積・再興事業報告書 第3巻 墓屋武千恵・平良優季	復元模造製作に伴う調査

凡例（含有する材質の項目）
・顔料は、目視で確認できる色：調査で得られた元素（顔料等の名称）とした。 例示　黄色：砒素（石黄）。
・緑色・橙色等の二色以上の色材を混ぜないと出せない色の記載の例示　緑色：鉄（ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ）・砒素（石黄）。
・植物染料は、調査結果と通常の染料の名称が一致することが多いので、統一して表記した。 例示　青色：藍　緑色：藍・砒素（石黄）。
・出典で略して記載した参考文献は別途正式な刊行物の名称を記載しておく。
・調査者は研究代表者若しくは、調査分析作業において主たる調査者を記載した。参加した個々の研究者は個々の参考文献を参照してもらいたい。
・本一覧表は、2022年3月現在で公開されている報告を取りまとめたものである。今後、各機関で資料調査の事例が増え、その調査結果が公開されれば、さらに詳細な前代の色材調達の傾向をとらえることができると思われる。

表5

色材の各分野との比較と特徴

	絵画・書跡	漆芸	歴史・金工	染織	陶芸	色材使用の特徴
白色	鉛（鉛白）。 ｶﾙｼｳﾑ（胡粉）※。	鉛（鉛白）。 酸化亜鉛 ｶﾙｼｳﾑ（胡粉）※。	鉛・ｶﾙｼｳﾑ・ｶﾘｳﾑ・鉄（ｶﾞﾗｽ）。 鉛（ｶﾞﾗｽ）。 ｶﾘｳﾑ・ｶﾙｼｳﾑ（ｶﾞﾗｽ）。	鉛（鉛白）。	ｶﾙｼｳﾑ。 鉄。	・近世期の日本における白色色材の使用は胡粉中心であり鉛白を豊富に使用する琉球の事例は特異なものと言える。 ・鉛白は絵画・型染（紅型）に多用され漆工品でも密陀絵加飾を中心に使用。
赤色	水銀（辰砂）。 鉛（鉛丹）。 鉄（代赭）。 赤色染料。 ﾗｯｸ（臙脂）。 ｺﾁﾆｰﾙ（臙脂）。	水銀（辰砂）。 鉄（弁柄）。 水銀（辰砂）・鉄（弁柄）。 鉛（鉛丹）。 水銀（辰砂）・砒素（石黄）。 水銀（辰砂）・染料。	銅（少量）・亜鉛（少量）・鉄（少量）（ｶﾞﾗｽ）。 鉛（ｶﾞﾗｽ）。 鉄（少量）（ｶﾞﾗｽ）。	水銀（辰砂）。 臙脂。 鬱金・紅花。 水銀（辰砂）・染料（茜若しくは蘇芳の可能性有り）。 鉄（弁柄）。 紅花。 蘇芳。 茜。	鉄・鉛・亜鉛。	・辰砂は檔案史料に記録が多数残っており、実際に絵画・漆工品・型染（紅型）等、多くの分野で多用されていたことが確認できる。 ・臙脂も輸入や正殿重修に使用された記録があり、実際に絵画・染織には使用されている。 ・蘇芳・紅花・茜等の輸入染料の使用も確認された。なお、紅花は一部国内産の可能性もある。
黄色	黄色染料。 藤黄。 鉄（黄土か）。	砒素（石黄）。 鉄（黄土）。 銅・亜鉛（真鍮か）。	鉛・鉄（少量）（ｶﾞﾗｽ）。 鉛・ｶﾙｼｳﾑ・鉄・錫（ｶﾞﾗｽ）。 鉛（ｶﾞﾗｽ）。 鉄（ｶﾞﾗｽ）。 鉛・銅（ｶﾞﾗｽ）。	砒素（石黄）と染料（福木の可能性有り）両染 染料（福木の可能性有り）。 砒素（石黄）。 鬱金。 黄檗。 水銀（辰砂）・砒素（石黄）。 鉄（黄土）。	鉄。 鉛・亜鉛・ｶﾙｼｳﾑ。	・石黄は檔案史料に記録が残っており、実際に型染（紅型）資料に地色染含めて多用されている。 ・漆工品の石黄使用の事例では密陀絵加飾等で部分的な使用や緑色表現の混色色材、箔絵の箔下漆としての使用事例が残っている。 ・絵画では藤黄等の黄色染料使用の事例が確認できるが、染織・漆芸のように石黄の使用事例は残っていない。分野間で黄色色材の使用に差異がある。 ・但し代赭と主要原料が同じ黄土は使用事例は少ないが絵画・漆芸・染織に使用されている。 ・染織では国内調達が可能な鬱金の使用も確認できる。
青色	銅（群青）。 鉄(ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ)。 藍。 ｺﾊﾞﾙﾄ。 青色染料・墨混色。	鉛（鉛白）・有機系紺色顔料。 鉄（ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ）。	ｺﾊﾞﾙﾄ・鉛・鉄・ｶﾙｼｳﾑ。 鉛(微量)・ｶﾘｳﾑ(多量)・ｶﾙｼｳﾑ(多量)・ﾏﾝｶﾞﾝ(少量)・鉄（少量）・銅(少量)（ｶﾞﾗｽ）。 ｺﾊﾞﾙﾄ（ｶﾞﾗｽ）。 鉛・銅・亜鉛（ｶﾞﾗｽ）。 銅（軟玉の一種）。 鉛（軟玉の一種）。	鉄(ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ）。 藍。 鉄(ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ）と藍両染。 鉄(ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ)・鉛（鉛白）。 藍・墨。 黄檗・藍。	砒素・ｺﾊﾞﾙﾄ・ﾏﾝｶﾞﾝ・鉄・ﾆｯｹﾙ・銅・亜鉛・ﾋﾞｽﾏｽ（呉須）。 砒素・ｺﾊﾞﾙﾄ・ﾏﾝｶﾞﾝ・ﾆｯｹﾙ・銅・亜鉛（呉須）。 鉛・亜鉛・ｺﾊﾞﾙﾄ・砒素（呉須）。	・絵画・染織で琉球国内調達が可能な藍の使用が確認できる。 ・乾隆42（1777）年の檔案史料に輸入記録が残る洋青（ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ・ベロ藍）の使用が絵画・染織・漆芸で確認できる。 ・ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰが確認された資料は現状では製作時期が1777年以降と推測でき、琉球関係文化財の製作年限を考察する基準の一つとなることも重要である。 ・例示として漆芸のﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰの使用事例は円覚寺仁王

						像残欠で19世紀頃に仁王像の修理があったことを裏付ける根拠の一つとなる。 ・石青（天然呉須）は檔案資料に記録が残っており、実際に陶器の染付の釉薬として砒素・ｽﾏﾙﾄ等が含まれる天然の鉱物顔料と思われる素材が確認できる。
緑色	銅（緑青） 銅・砒素（花緑青か） 藍・藤黄混色	銅（緑青）。 砒素（石黄）・藍混色。 砒素（石黄）・有機系紺色顔料（藍か）混色。 銅（緑青）・鉛（鉛白）混色。 銅（緑青）・砒素（石黄）混色。 砒素（石黄）・水銀（辰砂）混色（未検出の青色系色材存在か）。	鉛・銅・ｶﾘｳﾑ・鉄（ｶﾞﾗｽ）。 銅・鉛・亜鉛・ｶﾙｼｳﾑ（ｶﾞﾗｽ）。 鉛・銅（ｶﾞﾗｽ）。 鉛・銅・亜鉛（ｶﾞﾗｽ）。 ｶﾙｼｳﾑ・鉄（軟玉の一種）。	鉄(ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ)・染料。 藍・黄色色材（材質不明）。 鉄(ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ)・黄色色材（材質不明）。 鉄(ﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ)・砒素（石黄）。 藍・鬱金（重染）。 黄檗・藍（重染）。 藍・砒素（石黄）。	銅・亜鉛（真鍮釉）。	・緑色系色材は緑青のように単体の鉱物顔料の使用も確認できるが、多くは黄色系色材と青色系色材の混色で使用されている。 ・漆工品では輸入鉱物顔料の石黄と国内調達が可能な植物染料の藍の混色事例が確認できる。 ・染織は黄色系色材が輸入鉱物顔料の石黄、植物染料の黄檗・国内で調達可能な植物染料の鬱金等が使用されている。青色系色材が鉱物顔料はﾌﾟﾙｼｱﾝﾌﾞﾙｰ、植物染料の藍が使用され、漆工品より多様な組合せで緑色の表現を行っている。 ・絵画は混色の場合、藍・藤黄の植物染料の組合せとなり石黄使用の事例は現在確認されていない。 ・陶芸では銅・亜鉛の真鍮釉の使用が確認できる。
黒色	炭素（墨）。	炭素（墨）。 鉄。 鉄（黒漆の顔料由来）。 炭素（油煙（墨）。黒漆の顔料由来）。	鉛・ﾏﾝｶﾞﾝ・鉄・ｶﾘｳﾑ・銅・ｶﾙｼｳﾑ（ｶﾞﾗｽ）※。 銅・鉄・鉛（ｶﾞﾗｽ） 鉄・銅・亜鉛（ｶﾞﾗｽ）。 鉄（ｶﾞﾗｽ）。 鉄・ﾏﾝｶﾞﾝ（ｶﾞﾗｽ）。 鉄・銅（ｶﾞﾗｽ）。 鉛・鉄・ﾏﾝｶﾞﾝ・銅（ｶﾞﾗｽ）。	鉄（ﾀﾝﾆﾝ系植物染料使用の鉄媒染推定）。 墨。 墨・藍。		・墨は記録や書跡を認める材料としてだけでなく、型染（紅型）の黒色表現にも使用された。また染織では藍に墨を混ぜて濃青色を表現する使用事例も見受けられる。 ・「貝摺奉行所関係文書」や首里城重修関係史料では灰墨の調達記録が残っており、漆に混ぜて黒漆精製にも使用された。実際に漆塗膜分析では漆塗装の層に沈殿する油煙が確認されている。
金色	金。 銅・亜鉛（真鍮）。	金※。 銅・亜鉛（真鍮）。 錫・硫黄（硫化錫使用の模造金の可能性有）。	金。			・金は金製品の躯体、箔絵・沈金等に使用。「貝摺奉行所関係文書」に「和三寸三分かく赤金薄」とあり日本市場より調達したと思われる。また「赤金薄」とあり赤味を帯びた金色や金箔を使用していた。前近代では金の純度は低いと思われるが、何がしか赤味をあげる科学的な措置を行っていたと思われる。

銀色	銀。	銀。	銀。			
※備考	※白色の本紙全体からｶﾙｼｳﾑ検出は表装具の美栖紙・宇陀紙由来の可能性有。 胡粉使用の絵画No.17は日本人絵師の模写の可能性有。	※白色の胡粉事例は円覚寺仁王像。屋外建築・彫刻には胡粉使用か。その他のｶﾙｼｳﾑ検出事例は塗膜下地層。 金・砒素（石黄）が同一ポイントより検出事例が多い。箔絵の箔下漆に黄色色材使用。	ｶﾞﾗｽ製品は鉛ｶﾞﾗｽの事例が多いが一部、ｶﾘｳﾑを使用したｶﾘｶﾞﾗｽの可能性のある事例もある。	型染（紅型）資料は地色も含めて輸入鉱物顔料を多用しつつ植物染料も使用している。 織資料の糸染色材は基本植物染料中心だが一部辰砂による顔料で糸染を行った事例もあった。	染付の陶器の青色顔料には輸入呉須を多用している。	

まとめ

・「御籠飯」、「御玉貫」・「御玉垂」は、製作技術のルーツや、原材料は国外産だが、その道具の仕様・器形は、今のところ他地域に類例はなく、琉球独特の祭祀儀礼道具。

・共飲儀礼に使用される「御籠飯」、「御玉貫」・「御玉垂」は、国外の工芸技術を導入し、舶来の原材料で製作された王府にしか調達しえない祭祀儀礼道具と位置付けられていたのではないか。

※ただし近世琉球末期になると、王府の祭祀儀礼を富裕な士族層（首里・那覇、離島を含めて）も模倣し、製作仕様を落とした「御籠飯」、「御玉貫」を製作した痕跡はある。

※「御籠飯」の場合、総沈金から箔絵。図案の簡略化。家紋を自家の家紋とする。「御玉貫」の場合、配色の変更。家紋を自家の家紋とする。

・古琉球期、女神官等に運営・保管管理を任されていた「御籠飯」、「御玉貫」・「御玉垂」は、近世琉球期にも共飲儀礼の場で祭祀儀礼道具として引き続き使用。

・古琉球的な沈金で花鳥虫を描写したり、六弁花を編んだ図案が、近世琉球期になると男性官人に運営・保管管理が任されるようになり、王家の紋章である巴紋を中心とした図案構成に変容していった。

・「御籠飯」、「御玉貫」・「御玉垂」は、古琉球期、女神官を担い手とした宗教的な神事としての共飲儀礼で使用された道具から、近世琉球期には、少なくとも首里城を中心とした王府祭祀の中では王族や首里士族を中心とした男性官人が参加する祭祀儀礼空間の中で、国王家の王権を誇示する道具として使用。国王家の琉球支配と家臣団の身分・知行・役職等の安堵を確認しあう場を演出する政治的な装置の一つとして機能を変容させながら古琉球期から近世琉球期にかけて長期間、王府の中で役割を果たした祭祀儀礼道具であったのではないか。